

---

# とあるのんきな炎女王（フレイムクイーン）

ロンパニール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるのんきな炎女王フレイムクイーン

### 【Zコード】

Z2680V

### 【作者名】

ロンパール

### 【あらすじ】

不良たちに絡まれていた女性を助けた上条当麻。

その女性はなんと、レベル5の第6位『炎女王フレイムクイーン

女性の名前は静奈しづな

涼音すずね

非常におっとりとしている彼女は、レベル5たちと友達で一方通行の幼馴染で同じ学校。

闇の仕事をしながら、普通の高校生活を送るレベル5たち、麦野がキレまくつたり、垣根がいじられたり、一方通行が恋をしたり・・・。レベル5たちのドタバタ学校生活！

似たような題のものがあるみたいですが  
これはまったく別のものです。

## ナンパ？

「」は学園都市。

学生たちが毎日能力開発に取り組んでいる町だ。  
もちろん、能力には限界がある。

自分の能力がこの程度だと決めつけてしまい、不良になってしまつ  
者もいる。

そんな不良たちに、ある女性が絡まれていた。

？？？「あらあら～、これはナンパかしら～？」

不良たちに囲まれているのに女性は微笑んでいた。

不良「はっ、分かったなら俺らについて来いよ」  
不良「抵抗したら・・分かつてるな？」

周りは見て見ぬふりをする。

しかし、そんな中にある少年が助けに入る。

1：誰かしら？（前書き）

すみません、レベル6じゃなくて第6位でした。

## 1：誰かしら？

「え～と…あなたは誰かしら～？」

「…」

不良「…」

女性の言葉にみんな黙る。

しかし、すぐに彼女を助けようとした男が叫び声を上げる。

「アンタ！何やつてんだ！せっかく知り合いのふりして助けよつとしたのに…」

「あらあら～、そつだつだの～。じゃあ、もう一回しましょうか～」

「もう遅い！不幸だー！ー！」

そう叫ぶ男は上条当麻。

右手に異能の力なら神の力でも消してしまつ能力がある。

女性は二コ二コとしたままだ。

「あらあら、そつなの～～めんなさいね～」

当麻「うひ・・」

不良「おい、テメー、覚悟はできんだけりうな？」

当麻「うひーー！」

恐る恐る後ろを見ると怒っている不良たちがこちらをみていた。

またもや当麻は「不幸だ」とつぶやく。

「そついえば、自己紹介がまだだつたわね～。」

私の名前は静奈涼音しづなすずねっていつの～

よろしく~

当麻「アンタそんなことしてる場合じゃないだろ!~逃げろー。」

涼音「大丈夫よ~、私、能力者だから~」

当麻「いくら能力者でもこんな大勢の不良相手に・・・」

不良「死ねーーーーー!」

涼音「大丈夫だから~」

不良が襲い掛かる。

しかし、次の瞬間、涼音、当麻と不良たちの間に炎が遮るように現れる。

いきなりの出来事にみんなは目を丸くする。

不良「なつ・・・!~なんだよこれ!~!」

不良「おい!~こいつまさか・・・!~!」

不良「ひいいいいーーーー!~!」

なぜか不良たちが大慌てで逃げていく。  
訳が分からぬ当麻はその後ろ姿を見る。

当麻「あれ・・?~なんで逃げるんだ・・?~てかさつきの炎・・」

涼音「分かった?私はレベル5の第6なのよ~」

当麻「第6位!~?」

二口二口した笑顔でサラッといつ女性を当麻はあり得ないものを見るような目でみる。

当麻「え?まじ・・?」

涼音「マジよ~、驚いたかしら~?」

当麻「上条さんはすつごく驚きました。てか、なんでこんな夜遅くに?~」

涼音「それはね～、転校して引っ越ししたんだけど迷っちゃったのよね～」

当麻「えっ？ 大丈夫なのか？」

涼音「大丈夫よ～、だってこの道をまっすぐ行けば家だから～」

当麻「…つまりアンタは行く途中に不良に絡まれたのか…」

涼音「それじゃあ、帰るわね～」

当麻「あ・・ああ・・」

笑顔で帰つていいく涼音。

その姿をみた当麻は

当麻（ビコビコとほえらい違いだな・・）

などと思っていた。

そのまま家に帰つていいく。

## 2・休日のレベル5たち

涼音「おはよう～」  
一方通行「あア、涼音か」

次の日、午前8時から涼音は友達と待ち合わせをしていた。  
その友達がすごい人ばかりだ。

彼女自身すごいのだが、今いる友達は第1位と第2位、第4位、第7位なのだ。

周りの人たちはレベル5の集まりにざわついている。

麦野「ちょっと、アンタ毎回来るの遅いわよ」

涼音「ごめんなさいね～、実は昨日家に帰るのが遅くなつて～」

垣根「ああ、一方通行と同じ高校か。しかも同じクラスだろ？」

涼音「そうよ～」

削板「幼馴染で同じクラスか。まるで漫画のようだな」

一方通行「てか、今日は何すんだ？」

涼音「やっぱりゲーセンでしょ～」

垣根「いやいや、合コンだろ」

麦野「マッサージがいい」

一方通行「コーヒー飲みて～」

削板「どこのでもいいぞ」

見事に意見がバラバラのレベル5たち。  
結局、コーヒーと合コンを抜き、  
マッサージ ゲーセンという順番に行くことになった。

麦野「ここよ。人気のマッサージ店は」

涼音「今思つたんだけど、麦野はここに来たことあるの～？」

私は一回もマッサージ店來たことないんだけど～」

麦野「まあ、週に1・2回は行つてゐるわ。

でも、ここに来るのは初めてよ」

一方通行「まさか俺らもすんのか？」

垣根「外で待つとくぜ」

麦野「何言つてんの。するに決まつてんでしょう」

削板「何事も挑戦だぞ」

涼音「あらあら～、いこいとまつわね～

騒ぐ一方通行と垣根を無理矢張マッサージ店に連れて行く。

・・・

麦野「あ～、気持ちいい～」

涼音「本当ね～、とつても気持ちいいわ～」

気持ちよさそうな顔をしながらマッサージを受ける女。

男子は隣の部屋で悲鳴を上げている。

なぜなら今は激痛足っぽマッサージを受けているからだから。よを見をしてこりつちにメニューにいたのだ。

麦野「男子の叫び声が子守唄に聞こえてきた」

涼音「本当ね～。不健康な証拠だわ～」

気にすることもなくその声を聞く女子。

隣の部屋では・・・

垣根「死ぬ！死ぬ~~~~！」

一方通行「イデデテツ！！」

削板「こ・・根性・・・だ！！」

叫ぶ「人と必死に根性で我慢する削板。

垣根「くそー！麦野のやつこんなメニュー入れやがって・・・・！」

一方通行「後で殺す・・・アデデツ！！」

削板「根性が足りないな二人とも！」

垣根「でも、この中で一番痛いの一方通行だよな」

削板「不健康だからな」

そんなことを言つてているうちに足っぽは終わり。  
普通のマッサージに入る。

一方通行「あ～・・・気持ちいいな」

垣根「オッサンかよ」

一方通行「あア！？殺されたいんですけどア？」

削板「そろそろ時間だぞ」

マッサージが終わり、外に出ると笑つている麦野がいた。

麦野「どうだつた～？」（笑）

垣根「殺す！」

一方通行「そこに居るーー！」

涼音「あらあら～、喧嘩は駄目よ～次はゲーセンね～

そういう一方通行の腕をつかみ進む。  
しかし、一方通行は顔を赤くする。

一方通行（おいおいいつ！－なんか腕に当たつてんだけビヨーー）  
涼音・一方通行以外（当たつてるな・・・）

そんな状態のままゲーセンに行く。

垣根「死ねええええええつ！－！」

そういう、画面にいるゾンビを打ちまくる。  
その横でみんなは面白そうにみていた。

麦野「ゲーム程度に本気にならなくとも・・・」

削板「おっ、ここにカーレースがあるぞー！」

麦野「私それやるー！」

そういう、お金を入めてやり始める。

最初は普通だったが後から・・・

麦野「オラオラツー！ぶつ飛ばすぞ」「ラアツー！－！」

すっかり本気になり口調が変わる麦野。

みんなは恐ろしいと思いながら見ている。

一方通行（とうとう本性現したぞ）

涼音（あらあら、自分で言つてたのにねー）

削板（こ・・根性・・・？）

## 垣根（いのへ）

それぞれそういう思いながら麦野をほって違うゲームを始める。結局、その日は9時になるまでゲーセンにいた。

### 3・学校までの道

涼音は一方通行の部屋の前にいた。

涼音「まだかしら~？」

一方通行「ちょっと待て」

制服に着替えて慌てて出でてくる。

涼音「アナタは本当に起きるの苦手なのね~。  
もう遅刻確定よ~？」

一方通行「マジかよ!」

時計を見ると8時45分だ。  
もつ無理だと思つた一方通行は走りびくに歩いていく。

涼音「あらあら~、アナタの能力を使えばすぐへんじやないの  
~？」

一方通行「じうせ遅刻だからこ'ンだよ」

涼音「そんのだから頭よくても通信簿はダメなのよ~？」

一方通行「何で知つてんだよ!」

涼音「この前チラツとつ見たの~」

横でギヤーギヤー一方通行が騒いでも涼音は笑顔で無視をする。  
そんな状態で歩いていくと、いきなり不良たちに囲まれた。

不良「よお、久しぶりだな・・・テメーを倒せば俺らが一位だ!」

一方通行「ハア~、またかよオ」

涼音「あらあら、お友達かしら~？」

一方通行「ンなわけねエだろ！」

涼音「だつて久しぶりつていつたじゃない！」

一方通行「それはこの前」<sup>こいつらと喧嘩したからだ！..</sup>」

不良「ああ？ 誰だこの女。・・・『長点上機学園』のやつか」

不良「もしかしてテメーみてえな悪魔なやつの幼馴染か？」

不良「はははっ！ お前に幼馴染なんかいたんだな！」

あざ笑う不良たち。

一方通行はヤバイと思い涼音を見る。

涼音は笑っているが、赤い髪の毛は燃えるように逆立つている。  
その姿をみた不良たちは笑うのをやめ、涼音を見る。

不良「おいおい・・なんだよそれお前、炎系の能力者か？  
だつたら残念だつたな！俺らは全員レベル2以上なんだよーーー！」

それぞれ能力をだし、脅す。

しかし、二人とも脅えたりしない。

不良「お前、まさか本当にそいつの幼馴染か？」

悲しいな、テメーの幼馴染は悪魔の子だぜーーー！」

不良「そうにちがいねえ！ーーー！」

またもや笑い、二人に襲い掛かる。  
しかし、涼音は逃げない。

涼音「そうー、私の大事な幼馴染にそんなこと言つのねー・・・消  
えて」

ボアツー！

不良「うわあっ！なんだよこれ…」

不良「熱い！熱い！！」

いきなり一方通行と涼音周りを炎が囲む。

襲い掛かってきた不良たちは炎に触れてしまい、あまりの熱さに叫び声を上げる。

涼音は不良たちを一旦見ると、そのまま何も無かつたかのように歩き始める。

後に続いて一方通行も歩く。

不良たちが喚いているが無視をする。

一方通行（・・涼音は友達を大事にするからなア・・・）

そんなことを思いながら学校に向かう。  
教室に入った途端、先生に説教をされた。

#### 4：一方通行の過去　自分も同じだから

少年は最初は普通の子だった。

普通に遊び、笑い、生きていた。

しかし、大きくなるにつれて普通のことが出来なくなつていった。  
能力が強くなつていったからだ。

ある日、いじめっ子達が少年をいじめようとした。

何も言わない少年をみていじめっ子の一人は殴るうとした。  
しかし、いじめっ子の手はあり得ない方向に折れ曲がつた。  
それを見たいじめっ子たちは驚いた。

しかし、また一人、少年に体当たりをしようとした。  
だが、それも出来なかつた。

吹き飛ばされたからだ。

いじめっ子たちは悲鳴を上げて帰つていく。

「化け物」

と少年に言いながら。

その言葉に少年は傷ついた。

しばらく呆然としていると、いじめっ子たちが親を連れて戻つてきた。

手を折られたこの親は少年を殴ろうとした。

しかし、その親も子と同じように手が曲がつた。

親たちも驚え、ついには警察を呼んだ。

しかし、警察も同じように怪我をしていく。

何もしていの人に人が傷ついていく、「化け物」と呼ばれる。

幼い子供にも、自分は普通じゃないと分かつた。

そして、とうとう軍隊も動き出した。

銃を向けられたりしたが、すべて跳ね返り、また人が傷ついた。

戦車も、ミサイルも、銃も出された。

少年はドンドン心を閉ざしていく。

見つからないように建物の隙間に隠れる。

もう、街には軍隊以外誰も居なかつた。

みんな、少年を「化け物」と認識し、逃げたのだ。

少年は一人寂しく、ずっと逃げ続けた。

食べず、休まず、寝ずに少年は逃げ続けた。

とうとう体に限界が来て建物の中で座り込む。

軍隊は今頃自分を探しているだろうと、思いながら壁にもたれる。自分はこのまま「化け物」と呼ばれながらここで死ぬのだと思い、目を閉じる。

その時、足音が聞こえてきた。

少年、一方通行は目を開けて誰が来るのか見る。

表れたのは一人の、一方通行と同じくらいの少女だった。

少女は真っ赤な、炎みたいな目と髪をしていた。

軍隊ではない、人がいることに驚く。

そして、この少女も自分を捕まえようとしているのだと思い、少女を睨む。

少女は近づいてくる。

一方通行「・・・オレを捕まえに来たんだろ。化け物を」

睨みながら言う。

しかし、少女は首を横に振る。

少女「違うよ、助けに来たの。ほら」

そういう、背負っていたリュックをおろし、中から水と食べ物を出す。

あり得ないことに一方通行は驚く。

一方通行「・・なんでオレを助けるんだ？」

聞くと、少女は悲しそうな顔をして笑う。

少女「私も、アナタと同じ『化け物』だから」

一方通行「オレと・・・！？」

少女「そう、私、「化け物」らしいの・・・見ててね」

そういう、自分の腕に持つてきたナイフを刺す。

いきなりの行動に一方通行は驚く。

血が溢れてきたが、10秒ぐらいで傷口が炎に覆われる。  
炎が消えると、傷は治っていた。

少女「ね？「化け物」でしょ？」

再び悲しそうに笑う。

一方通行はその表情みて少女は自分と同じなんだとわかる。  
証拠を見せてもらった後、少女に言われて食べ物を食べる。

一方通行「お前はどうすんだ？このままだとオレ達は殺されるぜ」「少女「うん、だから、味方してくれる人が外で待ってるの。学園都市っていうところなら私たちと同じ、能力を持つてる人がい

るんだって。

そこに連れて行つてもらえるんだよ。

行こうとしたときにアナタのことを知ったの。

だから、一緒にいこ」

手を伸ばす。

一方通行は少し笑うとその手を取り、立つ。

一方通行「オレは・・・いけねエな、自分の名前忘れちまアつた・・・」

少女「そうなの・・・私は静奈 涼音! よろしくね!」

そういう、涼音はこいつと笑う。

## 5：学校では・・・（前書き）

御坂と麦野、第5以外は一方通行と一緒に学校の設定です。

## 5：学校では・・・

先生「こり、一方通行。授業中に寝るな  
一方通行」いて」

ポカッと殴られ、目が覚める。

学校に着き、説教された後、授業中に一方通行は寝ていたのだ。  
悲しい過去の夢を見ていたらしい。

ちなみに、なぜ反射をしていないかといふと、涼音が一方通行が能  
力を使えないようにできている腕輪を作り、つけているからだ。  
涼音はああ見えて天才なのだ。

涼音「あらあら～、私は起こしたのよ～？  
だけど起きなかつたの～」

一方通行「どうせオマエの起こし方は少しつづくだけだろ？」

涼音「せいかーい

先生「とりあえず寝るんじゃないぞ。じゃあ、次行くぞ」

黒板に数字を書き始める。

今は数学の時間らしい。

つまり4時間目だ。

一方通行は2時間目から寝ていたので国語が出ている。  
国語をしまい、数学を出す。

一方通行「ファ～、早くおわんねエかな～？」

涼音「居眠りは駄目よ～、あと10分だから頑張りましょ～  
あつ、あと、3時間目理科だつたんだけど～  
アナタが寝てるのを見て怒つてわよ～」

一方通行「どうでもイイ」

涼音「そんなのだから通信簿最悪なのよ～？」

一方通行「ここでいうなーーーーーー！」

涼音「あらあら～、ごめんなさいね～」

先生「うるさい！！」

二人を教科書で叩く。

お昼、二人は食堂にいた。

二人とも弁当は持つてこない方だからだ。

一方通行「はア～、あと2時間かア～」

涼音「そうね～、それにアナタの大っ嫌いな体育があるわね～」

ニコニコしながらハンバーグセットを食べる。

一方通行はいつものようにコーヒーを飲みながら食べている。  
周りから見れば恋人のよう二人は常に一緒にいる。

一方通行も最初は一緒にいるのをやめてくれと言つたが

涼音は

涼音「別に一緒にいてもいいじゃない。

幼馴染だし～」

と、言い聞かなかつたのだ。

今では普通になつてゐる。

そんな二人の中に、男が一人入り込んできた。

垣根「よつ、相変わらず仲がいいな

一方通行「クソメルヘンか」

垣根「オレ垣根」

涼音「別に普通でしょ～？それより何しに来たの～？」

垣根「お昼に食堂で食う以外何がある?」

涼音「ただ来ただけ?」

垣根「ねえよ」

そういうながら涼音の隣に座る。

削板は今頃教室で弁当を食べているだろう。

一方通行は垣根を睨みつけながら食べる。

それに気づいた垣根はニッと笑う。

垣根「大丈夫だ、お前の幼馴染に手は出さねえよ」

一方通行「そんな心配なンかアしてないんですけどオ」

涼音「大丈夫よ、もし変なことしたら焼くだけだから」

垣根（恐ろしい・・・）

一方通行「もうじちまHよ」

そんなことをしているうちに5時間目まで5分となつた。

3人は急いで教室に戻る。

5時間目は社会で、6時間目は体育だった。

一方通行は能力頼りのため体育は嫌いだ。

そのため、毎回ズルしようとする。

しかし、涼音が無理やり授業を受けさせる。

そのたびに抵抗するのだが、身体能力では涼音の方が上のため、毎回負ける。

帰りの時には、一方通行は用事があるといい、先に帰ってしまった。

そのため、涼音は一人で帰る。

そして、また不良に絡まれる。

## 6・また絡まれました

一方通行が先に帰つてしまつため、一人で帰つていた涼音はまた不良に絡まれていた。

不良「よお姉ちゃん、俺らと樂しことこ行こうぜ」

不良「まあ、無事に帰れるかしらねえけどよー」

不良「ぎやははははっ！！」

涼音「樂しいことってどんなことかしら？？」

不良「そうだな、泣くほど樂しいぜ！じゃあ行くか」

涼音の肩を掴もうと手を伸ばす。

しかし、その手はある男に掴まれた。

当麻「てめえら、悪いことしてんじやねえよ」

そう、不幸少年の上条 当麻だ。

邪魔をされて不良たちはキレる。

不良「ああー？なんだテメー！邪魔すんじやねえよー！」

不良「やつちまえー！」

喧嘩に巻き込まれないように周りに人はいなくなる。

そんなこと気にせずに、不良たちは当麻に襲い掛かる。

相手は3人だから大丈夫だろうと当麻は構える。

しかし、構えた途端、裏道から大勢の不良がぞろぞろ出でてくる。

当麻「えええーーー！こんなの無理無理ーーー！」

逃げようとするが、囮まれ、逃げることもできない。

そのうち、一人が襲い掛かってきたため殴る。

しかし、相手は喧嘩に慣れているため、一発だけでは少ししか効かない。

不良「おい！誰かその女を連れて行け！！」  
不良「おうつー！おい女つー！」

涼音の手を掴み、走る。走る。

しかし、涼音はその男を投げ飛ばした。  
地面に叩き付けられた男は気絶する。

涼音は目を開き、不良たちを見る。

涼音「あらあら～、私の大事な友達に手を出したら・・・火傷するわよ」

ギロリと不良たちを睨む。  
睨んだ後、指を鳴らす。

すると、当麻の周りを炎が囲む。

不良「へつーこんな炎くらー・・・！」

そういう、中に入ろうと手を伸ばす。  
しかし、あまりの熱さに手をひっこめる。

不良「あちちちちー！テメーレベル4かー！」

涼音「残念ね、レベル5・第6位、静奈 涼音よ  
不良「レベル5・・・！？畜生！？逃げるー！」

レベル5だと知つて不良たちは逃げていく。

後には、涼音と、まだ炎に囲まれた当麻が残った。

二コリと、元の笑顔に戻ると当麻がいる場所を見る。

涼音「今出すから待つてね～」

当麻「いや、その必要はねえよ」

声が聞こえたと思ったら、次の瞬間、炎は消された。あり得ない出来事に涼音は驚く。

とは言つても、目を瞑つたままだが。

涼音「あなた、レベル5の水系の能力者？あらあら、でもレベル5に水なんてあつたかしら～？」

首をかしげる。

それを見た当麻は笑う。

当麻「いや、オレの右手には異能の力なら神の力でも打ち消す能力があるんだ。

まあ、レベル0だけどな。

てか、アンタまだ不良に絡まれてたのか・・・

涼音「そうなのよ～。それにしてもすごい能力ね～」

そういう、当麻の頬が切れていることに気付く。

涼音「あらあら～、頬が切れてるわ～」

当麻「あっ、本当だ。まあ、このくらいの傷なら大丈夫だ」

涼音「ダメよ～ばい菌が入っちゃうから～、ちょっと動かないでね

」

そういう、人差し指を傷口に近づける。

人差し指から出た炎が傷口を覆い、消えたころには傷は治っていた。

涼音「はい、おしまい」

当麻「すげえ・・・治つてる・・・でもどうしてだ? アンタ多重能力者・・?」

涼音「うん・・・よく分からいわね~」

当麻「何でだ?」

涼音「私の能力は少し特殊なやつ。

攻撃する炎、防御する炎、治す炎があるの~。それに炎ならマッチでもコンロでも操れるの~」

当麻「すげえな・・・」

涼音「すごいでしょう。この能力で私は・・・あの人を治してきたの・・・」

少し悲しそうに言つ。

「あの人」が誰か分からぬ当麻は誰かと聞く。

涼音「レベル5の第一位よ~」

当麻「あつ! 一方通行か!」

涼音「そうよ~、私、あの人幼馴染なの~」

当麻「アイツの! ? どんな奴なんだ?」

すると、また悲しそうな顔をする。

少し考えてから答える。

涼音「私と同じ、孤独で悲しい人よ・・・」

当麻「えつ?」

涼音「あつ、それじゃあそろそろ帰らないと、それじゃあね~」

笑顔に戻り、手を振り走っていく。

その後の姿をじばりくの間、当麻は見ていた。

**主人公紹介（前書き）**

後から変わるかもしれません

## 主人公紹介

名前：静奈しづな  
涼音すずね

性別：女

身長：168センチ 体重：55キロ

能力：レベル5の第6位『炎王女』フレイムクイーン

炎系の能力者  
攻撃、防御、治すなど、少し特殊

好きなもの・生き物・きらきらしたもの

嫌いなもの・虫・友達を傷つける、大切にしない人

髪型：赤い髪・肩までの短髪 少し癖がついており、シェリー・クロムウェルの髪型が少し優しくなったような髪型

目の色：赤

体型：巨乳で細い

口癖：あらあら～

性格は非常におつとりとしていて、友達以外のことにならめつたな

ことでは怒らない。

しかし、怒ればとても怖いらしい（一方通行談）

真剣になつたり、友達が傷つけられたりすると怒つて燃えるように  
髪が逆立ち、喋り方も伸びが無くなる。

「～」と伸ばして喋る。

いつも笑顔でいて、細目で、目が閉じられているので一方通行でも  
少ししか目を開けたところを見たことがない。

炎に耐性があるため、暑さは感じない。

また、少し天然で純粋。親友の麦野は、涼音が汚されない様にと、  
いつも目を光らせている。

レベル5の6人中、4人が友達で一方通行とは幼馴染。

一方通行とはいつも一緒にいるので周りからは恋人と勘違いされる  
が、本人はただの幼馴染しか思っていない。

身体能力でも、鍛えているので不良5人くらいなら素手で倒せる。

一方通行のことをあまり名前で呼ばず、「あなた」や、「あの人」と  
と言つたりする。

呼ばない理由は本当の名前では無いから。

過去：子供の時には容姿でいじめられていたが能力を人の前でした  
ために、

もつとひどくなり「化け物」と言われ、大人にも子供にもい

じめられ、

遠ざけられていた。

そのため、同情した人たちが助けるまではあまり笑わず、人に脅えていた。

同情した人に助けられるとき、自分と同じ「化け物」と呼ばれて

追いかけられている子、一方通行がいると知つて、一緒に学園都市に連れて行つてもらつた。

## 7：アイツのため

先に帰つた一方通行は暗い道を歩いていた。

不良が居そうな道には誰も居ない。

ここに来たのは目的がある、ある実験をするためだ。

涼音には言えない実験。

それはレベル6になるためにクローンを2万体殺すことだ。  
最初は断つた。

しかし、後でレベル6になれば誰も近寄らなくなると言われ始めた  
のだ。

一方通行（この実験が成功すれば・・・誰もオレに戦いを挑まなく  
なる・・・  
イイじやねエか）

不良たちが挑んでくるたびに一方通行は一度とはむかってこないよ  
うに恐怖心を植え込んできた。

しかし、不良は大勢いる。

その全てをはむかえないようにするのは長くかかる。

一方通行（それに・・・涼音が悲しまずにする・・・）

一番はそれだ。

小さいころ、お互い「化け物」と言われたため、最初はお互いだけ  
が頼りだつた。

周りの人たちは信用できなかつた。

それに、科学者たちが能力を見て一人に実験を毎日させた。

その実験で一人はいろいろな薬剤や注射をされた。

涼音は自分のことより一方通行のことを気遣つた。

毎回、注射の跡を悲しみながら能力で治してくれた。

そのころから、涼音を悲しませないように頑張ってきた。

この実験もレベル6になれば幼馴染と知つて不良たちは涼音に手を出さなくなるだろう。

そんなことを考えながら歩いていると一人の少女が立っていた。

ミサカ「アナタが一方通行ですね?」と、ミサカは確認を取ります  
一方通行「あア、さつさと終わらせるゼエ」

ミサカ「はい、それでは第9989次実験を開始します  
一方通行「あンまり手こずらせんなよ。クローン」

ただの人形

研究者にそういわれた。

彼女たちはただの人形だと。

一方通行（さつさと終わらせてレベル6になる！！）

そう考え、すぐに動き出す。

直ぐに終わらせないとせっかく彼女たちのことは人形だと思つていいのが消えそうだからだ。

ベクトルを変えて一瞬で近づき、殴る。

ミサカの体は吹つ飛び、ゴシャリと鈍い音が響く。

ミサカ「ぐはつ！！」

一方通行「死ねええエエエツ！！」

頭を踏みつぶす。

辺りに血が飛び散り、ミサカはもう動かなくなつた。

しばらく息を整えていたが不意に悲しみが浮かんできた。

一方通行（また殺した・・・悲しむことやつちました・・・）

その場に座りこみ、空を見る。

一方通行「ハハツ・・ハハハツ・・・！」

なぜか笑いがこみあげてくる。

しかし、長くここに居られない、早く帰らないと涼音が心配する。  
死体の後片付けは残りのミサカ達がするのだから大丈夫だろう。  
カバンを持ち、家に向かい始める。

## 8・涼音の過去 生まれてこなかつたらよかつた

涼音は、普通の両親から生まれた。にも関わらず、涼音の髪と目は炎のように真っ赤だった。

最初は親も周りの人も驚いた。

しかし、突然変異だと思い、涼音を愛した。

涼音は優しい子に育つていった。

しかし、幼稚園からは同じ年の子から遠ざけられるようになつた。

「炎の生まれ変わり」

「変な子」

そういうわれた。

しかし、小学校2年までは言われるだけだったので特に気にしなかつた。

自分のことを見に思わず接してくれた子も何人かいた。

そのため、嫌がらずに学校にも行つた。

しかし、小学校3年になり、いきなりいじめがひどくなつた。言葉だけではない、足を引っ掛けられたり階段で突き飛ばされたりした。

先生達が全員で何とかさせようとした。

しかし、收まらなかつた。

しばらくすると無視をされるようになつた。

給食を配つても受け取つてくれない、自分には給食を配つてくれない。

プリントを配るときも投げるように渡してきた。

涼音は同じ年とは喋らなくなつた。  
ドンドン人が恐くなつていつた。

少し失敗しただけでドジだクズだのたくさん言われる。

テストでいい点を取つてももまぐれだカソニングだの言われる。

本当は外に出たくもなかつたがそれでも親には心配をかけないよう

に学校には行つた。

机を廊下に出される教科書を破かれる。

毎日毎日いじめられる毎日。

4年になつたある日、クラス全員が彼女を囲み殴る蹴るをやり始めた。

涼音は必死に耐えたがついに我慢できなくなり叫んだ。

その時、不意に計算が浮かび、自分の手から炎が出てきた。

クラスの全員、悲鳴を上げ、涼音から離れる。

「化け物」

「炎の魔魔」

そういうながら逃げていく。

涼音（何で私は生まれたの？なんで私は生きてるの？私なんか生まれなきやよかつたのに・・・  
こんな「化け物」なんか・・・）

自分を責め始める。

炎のことは大人たちは信じた。

とうとう大人たちも加わり、前とは比べ物にならないほどのいじめを始める。

殴る蹴る、炎を近づける、屋上で落とそうとする。

「炎の魔だからこの炎操れるだろ?」

「だつて「化け物」だから」

笑いながら炎を近づける。

涼音はあまりの恐さに耐えきれなくなりあの時のように演算をした。すると、炎を持った男の子の手が炎に包まれた。

男の子は悲鳴を上げ、床に転がる。

先生が駆けつけ、水を浴びせ火を消したが、少年の腕には一生残る大やけどが残つた。

先生は涼音を叱つた。

しかし、涼音はもう怒つてしまつていた。

静かに言つ。

涼音「先生、先生が私を助けてくれないからですよ。

・・・燃えてください」

先生「えつ? ギヤアアアツ! ! !」

先生の体を炎が包む。

先生は重傷で病院に運ばれた。

涼音「私は「化け物」だから」

そういう、家に帰つた。

家に帰つた途端、両親は走り寄り、涼音を抱きしめた。

母「『めんね・・・』

謝り、まっすぐ涼音を見ると告げる。

母「涼音、逃げなさい」

涼音「えつ？」

父「お前のことを可哀そうに思った人たちが学園都市と言われる所に連れて行ってくれるんだ。

そこなら涼音と同じ子が沢山いる」

涼音「本当・・・？私と同じ子が・・・？」

父「そうだ。私たちのことはいいから、これを持って行きなさい」

リュックを渡し、外に連れ出す。  
外には、車があった。

母「元気でね。また会いに行くから・・・」

父「忘れるなよ」

涼音「お母さん！..お父さん！..」

車は走り出す。

涼音は泣きじゃくるが、泣いても無駄だと分かり、泣くのをやめる。

5時間乗つていると、突如人が居なくなつた。

運転手の人聞くと、「化け物」と呼ばれて殺されそうになつている少年がいると教えてくれた。

涼音「私と同じ「化け物」・・・おじさん、その子も連れて行く！」

！」

頼むと、快く承知してくれた。

車を降りると、涼音は目を瞑る。

人の体温を感じていいのだ。

しばらくすると、近くの建物の中の人を見つけた。

中に入ると、そこにいたのは真っ白の髪に真っ赤な目をした自分と同じくらいの少年がいた。

9：第3位～第6位

涼音「ん・・・」

暗い部屋の中、目を覚ます。

寮に帰り、ベットに倒れこんだままそのまま寝ていたようだ。

涼音「夢・・ふふ・・嫌な夢ね・・・」

笑い、電気をつける。

思い出したくもないつらい、悲しい過去。  
いじめの毎日。

涼音「本当・・私は何のために生まれたのかしら・・あつ、理由が

あつたわ・・

あの人を・・一方通行を守るため・・」

やつと見つけた信用できる友達。

彼と会ったのは10歳の時だつた。

お互い、「化け物」と言われ、友達を求めていた。  
そして見つけた。

涼音「・・まだ帰つてきでないのかしら～」

ふと氣になり、隣の部屋を見る。

一方通行が脅し、無理やり隣にしたのだ。

涼音「まだみたいね～」

部屋には誰も居なかつた。

暇なため勉強をしようと部屋に向かう。

その時、叫びながら走る少年と少女が見えた。

当麻「不幸だ――――！」

御坂「ちょっと待ちなさいよ――――！」

涼音「あらあら～、あれはいつたいなんのかしら？」「

面白ううなので飛び降りながら下に降りる。  
地面に着地をしたとき、一人が近づいてきた。  
そして前を通る。

涼音は当麻の横を走る。

いきなり現れたため、当麻は驚く。

当麻「ええっ！？何時の間に！？」

涼音「さつきよ～、あなたたちが私の寮の前を走ってるから面白そうだと思つてね～」

当麻「上条さんには命がけなんですよ～」

涼音「あらあら～、なんでなの～？」

御坂「まちなさい――――！」

電撃を飛ばす。

しかし、当麻は右手の能力で打ち消す。

涼音「便利な能力ね～」

当麻「この能力のせいだ上条さんは不幸なんですよ――――！不幸だ――――！」

涼音「不幸だ～」

当麻「真似をするな！」

涼音「面白かつたからつこ～」

御坂「無視すんな」「ララアッ！－！」

キレイている御坂が電撃を飛ばしまくる。  
流石に不味いと思い、涼音は炎を御坂に飛ばす。  
いきなりきた炎を必死に御坂はかわす。  
そして、標的を涼音に変える。

御坂「ちよつと…何すんのよ…！」

涼音「あらあら～、『めんなさいね』、でもさすがに危ないでしょ  
～？」

御坂「赤い髪・赤い目・あんた第6位の静奈 涼音じゃない！」  
当麻「涼音さん！上條さんの一生のお願い！ビロビリをどうにかして  
ください…！」

涼音「ビロビリ…？」

改めて御坂を見る。  
そして笑う。

涼音「フフフ、あなた第3位だったのね～」

御坂「なつ！何よ！文句あるの！？」

涼音「資料じゃ～負けず嫌いで直ぐに怒るつて書いてあつたんだけ  
ど～

本当らしいわね～」

御坂「…うつさこ…！」

またもや電撃を飛ばすが、涼音は炎で防御する。  
それを見て御坂は怒る。

御坂「頭きた！勝負よ…！」

涼音「いいわよ、じゃあ人の少ないところでね」

当麻「それじゃあ上条さんはこの辺で・・・」

御坂「アンタも来る・・・」

当麻「不幸だ――――」

引きずられていく。

そして、だれもいない河原にきた。

当麻は安全な場所で見る。

御坂「それじゃあ・・さっそく行くわよ――」

そういう、コインをはねる。

二人は御坂が何をするのかわかる。

涼音「あらあら～、最初から飛ばすわね～」

御坂「オラアツ――」

お得意のレールガンを飛ばす。

涼音は笑いながらひらりと軽くかわす。

涼音「手加減はないのかしら～？」

御坂「ないわよ――」

当麻「ちよつ！お前また――」

もつ一回レールガンを出す。

涼音「ちよつとめんべくさいわね～。だつたらこれはびつ～

炎をレールガンにぶつける。

御坂「はつーそんなものでレールガンが消えるわけが……な……い……」

なぜかレールガンが消えてしまい、炎が無防備の御坂に向かつて飛び。

涼音「コインを溶かせばあなたの必殺技は使えないわよね～。  
それじゃあ、私もいくわよ～」

そういうと、足元から炎が現れ、涼音を包み込む。

涼音「燃えちゃいなさい～」

御坂「何を・・・くつ！～」

御坂に向かつて一直線に炎が放たれる。  
何とかよけるが、また放たれる。

御坂「ちょっと・・・んのありなのー？・・・へいひえー…」

砂鉄を操り、伸びる剣のよじ立てにして涼音に飛ばす。  
しかし、涼音を包み込む炎に触れると砂鉄は一瞬で溶けてなくなってしまった。

御坂「そんな・・・！」

涼音「どうする～？降参するかしら～？」

御坂「誰がするか！～」

涼音「仕方がないわね～、じゃあ無理やり降参をせるわね～

言つた瞬間、御坂を中心に炎の渦ができる。  
あまりの熱さに御坂からは汗があふれ出る。

御坂「はつ・・はつ・・！」

涼音「どうある~?」のままだと死んじゃうわよ~?」

御坂「はつ・・・はつ・・・分かつたわよ・・・！降参・・・はつ・・・はつ・・・

涼音「OK」

一瞬で炎が消える。

やつと熱さから解放され御坂が膝をつく。

当麻「すげーな、ビリビリ倒したから第3位になれるのか？」

51

強さの順番じゃないのよ、私の能力はあまり利益はない

# 御坂「いのざか」

当麻「うわ――!」

またもや追いかけられる当麻。

置いてきぼりを食らつた涼音は療に帰り始める。

## 10・いつもの晩御飯

ドアの開く音がした。

そちらを見ると一方通行がいた。

笑顔で迎える。

涼音「お帰りなさい、遅かったのね～」

一方通行「あア、用事が長引いた・・腹減ったア」

涼音「スペアリブが安かつたから～スペアリブよ～」

一方通行「何でもイイ、早く作ってくれエ～」

涼音「じゃあ、お箸とか出して～」

一方通行「分かりましたア」

だるそりとお箸を出す。

料理ができない一方通行のために、涼音が一方通行の部屋で作つて  
食べるのだ。

涼音「それじゃあいだきま～す」

一方通行「いただきまアす」

手を合わせて食べ始める。

涼音の料理は普通においしい、だから残さず食べる。  
まあ、一方通行のために量は少なめだが。

涼音「そういえば～、何の用事だったの～？」

ピタリと食べる手を止める。

実験のことと言えば涼音は悲しむだろう、なんとかごまかす。

一方通行「・・・クソ不良どもと喧嘩だ。数が多くてなア、時間がかかった」

涼音「そうなの～、そういうえば～、プリントの宿題あったわよね～」

一方通行「・・・・・」

涼音「あら？」

そんなこと知らない、必死に思い出すが記憶にない。  
考えてみると、涼音が思い出したようにこう。

涼音「あらあら～、そういうえば3時間目の時あなたは寝てたわね～  
だつたら知らないはずだわ～」

一方通行「確かに理科だつたよなア・・・？ てつマジかよーーー。  
あのクソジジイ説教なげエンだよーーー！」

涼音「私は終わったわよ～、まあ、アナタの頭なら直ぐに終わるん  
じゃないの～」

一方通行「オレは早く寝たインだよ」

急いでご飯を食べ終わり、鞄から理科を出す。  
見るとプリントが挟まっていた。  
速攻で終わらせる。

横では涼音がのんびりとご飯を食べている。  
しばらくすると食べ終わり、食器を洗い始める。  
暇な一方通行は玄関を見る。

一方通行「それにしてもお前の防犯用の炎の威力はハンパねエなア・  
・・・」

涼音「一度と来ないようによ～

玄関には不良などが入ってこないように涼音の能力が張つてある。  
一方通行と涼音以外が勝手に入れれば防御の炎が遮る。

前に寮に帰つてみたら丸焦げの泥棒がいた。  
まあ、警察を呼んで連れて行つてもらつたが。

食器を洗い終わり、涼音は帰る。

涼音「それじゃあ明日へ寝坊しないようにこね～」

一方通行「しねエよ」

そういうと帰つていく。

一人になると一方通行は寝る準備をする。

しかし、ふと実験のことを思い出し座り込む。

一方通行「・・・オレは嘘ついてなにしてンだ・・・早く終わらせ  
てやる・・・」

そういうとキッチンと引いていない布団で寝始める。

御坂は一人、ブラブラ歩いていた。  
今日は当麻を見つけても追いかける気がない。

御坂「・・・私のクローンねえ・・・」

昨日、自分を見たと言われ、急いで調べたのだ。  
すると、レベル6になるために自分のクローンが2万体殺されるこ  
とが分かった。

昨日のうちにほとんどつぶし終え、残るは2だ。  
しかし、今はまだ昼間なので、夜に行こうしているのだ。  
そのとき、見覚えのある人が話しかけてきた。

御坂「アンタ・・・」

涼音「ねえ・・・その話聞かせてくれない？」

二人は喫茶店に行き、話す。

涼音「ふうん・・・そうなの・・・あの人があ・・・」

御坂「私、夜になつたら残りを潰しにいくの」

そういうと、涼音が自分も連れて行ってほしいと言い出した。

御坂「えつ・・・？でも危険よ？」

涼音「こうなったのはたぶん私。だから行きたいの・・・  
それに、相手もそろそろ闇にいる人たちを使つてくると思うから」

御坂「そういえばそうね・・・じゃあ、お願ひするわ」

涼音「任せても」

いつものように話を始める。  
まず作戦を立てる。

御坂「相手は一人だけじゃないと思うの。たぶん3人以上はいると  
思う」

涼音「そうね～、もし一人で2人を相手するのは大変だから、  
一緒に行動しましようか～」

御坂「そっちの方がいいわね。

後は壊すだけ。じゃあ、夜になつたらこの研究所ね」

そういう、一人は一旦家に帰る。  
服とかを買つたり、体力を残すためだ。

そして夜、御坂は潰す研究所の前で見つからな<sup>い</sup>ように待っていた。

御坂（あいつは何してんのよ！約束の時間はもう過ぎてるのに…）

もう10分は過ぎて<sup>いる</sup>。

すると、涼音が小走りでやつてきた。

涼音（ごめん。遅れた～）

御坂（遅いわ！）

涼音（ごめんなさいね～、それじゃあ入りましょうか～）

御坂「行くわよ」

御坂の能力でセキュリティを狂わせ、研究所に入る。  
そして、二人は早速走り始める。

御坂（このまま終わればいいんだけど・・・まあ、仲間がいるから  
大丈夫か）

涼音（なんかわくわくするわね～）

ブシュツ！！

その時、いきなり天井が切れ、落ちてきた。

しかし、御坂は自分の能力でずらし、涼音は防御の炎で防ぐ。

涼音「やつぱりいるわね～」

御坂「ええ、さて、相手はどこに？」

見つけた導線をたどると、一人の少女がこちらを見て笑っていた。

御坂「行くわよ」

涼音「ええ」

二人は走り出す。

相手、フレンダは惜しいなどと思いながら一人を見る。

フレンダ（相手は能力者みたいね・・まあ、結局殺すからどうでもいい訳だけど！）

また導火線にを付ける。

二人に迫るが、よけられる。

しかし、

フレンダ（よけるだけなんて、素人ね！）

導火線の先には爆弾を抱えた人形がある。

ドオオオオンツ！――！

御坂たちが居た場所が爆発で見えなくなる。

フレンダは、その光景を見て笑う。

フレンダ「にゃーはっはっはっ――まつ結局私の手にかかるばこんなもつて訳よ――」

そして、麦野たちに伝えようと携帯を取り出しかける。

フレンダ「あつ、麦野？終わったわよー。もう超楽勝――！まさかこんなすぐに終わるとは思わなかつたわ。結局、私の敵じやなかつたっていう訳よ――」

涼音「あらあら～、何が終わったの～？」

フレンダ「――？」

急いで携帯を離し距離をとる。

涼音は笑顔でフレンダの携帯を踏みつぶす。

涼音の後ろには呆れたようにこちらを見ている御坂がいる。無傷な一人を見てフレンダは慌てる。

フレンダ「ちよつ・・・…何で無傷なのよ…」

御坂「そんなの決まってるじゃない。防衛したからよ

フレンダ「でも、見たところあなたたちは炎と電気の使い手…  
防御なんて…」

涼音「それはいうわけはいかないわね～。とりあえず仲間のこと  
についてはいてもらいましょ～」

炎をフレンダに向けて放つ。

フレンダは何とかよけると逃げ始める。  
二人はめんどくさうにその姿を見る。

御坂「逃げたつて無駄なのに・・・ねえつ…！」

フレンダ「によわー！」

すぐ横を電撃が通る。

そして、そのまま物に当たる。

すると、当たったものは黒じげになってしまった。  
あまりの威力にフレンダは驚く。

フレンダ（なんのよこの威力～～！）

涼音「あらあら、敵はもう一人いるのよ~？」

フレンダ「あがつ！」

回し蹴りを腹に居れる。

何とか腕でダメージを薄くしたがそれでも吹っ飛ばされる。そして、地面に落ちて痛さで動けない隙に御坂はフレンダの肩に触れる。

フレンタの額に嫌な汗が流れる。

御坂「さあ、仲間の」と吐きなさい

フレンダ「わ――――――――」

電撃を流される。

あまりの痛さに叫び声を上げる。

涼音「早く吐けば命は助けてあげるわよ~?」

フレンダ（はつ一 そんなのはくわけないじゃなこ・・）「はよわー

涼音「吐きなせこ」

フレンダ「はつ・・・はい・・・」

悪魔の笑顔でフレンダの頭を掴む手に力を入れる。

諦めてフレンダは言おうとする。

その時、3人の後ろをレーザーが通る。

二人はレーザーが来た方を見る。

すると、女性が一人現れる。

麦野「危機一髪みたいね、フレンダ・・・涼音・・・？」

涼音「麦野？なんであなたが暗部なんか・・・」

二人は驚いた顔でお互いを見る。

二人は親友だからだ。

麦野「・・・今なら逃がしてあげるわ。だから・・・」

流石に友達を殺すのは嫌なので情けをかけて逃がそうとする。  
しかし、涼音は首を振る。

涼音「そうわいかないわ。私はあの人を止めるために来たの。  
アナタも情けなんてかけないで戦いなさい」

麦野「あの人・・・？一方通行がどうしたの？」

涼音「・・・あの人は、今、実験をしている。その実験はレベル6になるためのもの。のために、この御坂のクローンを2万体殺すの」

麦野「・・・」

麦野にしてみればクローンが2万体殺されようがどうでもいい。しかし、親友がその実験で苦しむのなら話は別だ。

麦野「・・・そう、ならこの仕事が終わつたとで生きてたら手伝つわ」

涼音「そうじないと。麦野らしいわ」

周りはついていけていなが、戦闘態勢に入る。

### 13・第3位＆第6位▽Sアイテム

『原子崩し（メルトダウナー）』が壁や床を破壊する。  
御坂と涼音は自分の能力を使い、器用に逃げ回る。

しかし、涼音は麦野が本気でやつていなことに気付いた。

涼音「麦野！本気で来なさい！それがあなたの役目でしょー！」

麦野「で・・も・・あなたは私の親友・・・ー！」

涼音「もし本気で来ないんだったら溶かすわよーーー！」

麦野「！！！」

涼音が炎を放つ。

麦野が逃げると、炎は床にぶつかり、床を溶かしていく。  
それをみた麦野は目を閉じる。

麦野（ふふ、涼音はいつもそうね・・いつもヘラヘラしてゐるのに真剣になると厳しくなつて・・本氣で行くか！）

御坂「危なーー！」

いきなり、「原子崩し」の威力が上がる。

涼音はにやりと笑う。

やつと本気になつたからだ。

麦野「フレンダ、貴方も戦いなさい。いくら私でもレベル5一人は無理だわ」

フレンダ「分かつたわ」

線に火をつける。

すると、御坂に向かって進んでいく

自分が狙われていることに気づき、御坂は舌打ちをする。

御坂「たくつ！ 何で私ばつかなの・・よーーーー！」

床を持ちげ、断ち切る。

涼音はすかさず「レンタに炎を放つ」と簡単一矢サうぐ。

涼音（やつぱり遠いから避けられる・・・でも近づいたら麦野の攻撃が・・・）

麦野「ハツ！何悩んでんだよ涼音！本気で行くぞおーーーーー！」

御坂「くっ！！」

考え事をしていたためこよけた」とができなかつた涼音を助けるため。

御坂は無理やり「原子崩し」を曲げる。

御坂「やつぱり! 私とおばみさとの技は同じもの……!」

フレンダ「私もいるのよ?..」

御坂「グハツ!」

すっかり麦野ばかり集中していたため、フレンダのことを忘れていた。

蹴りを食らって、壁に体を打ち付ける。

フレンダ「麦野ー、ここから殺していくの?..」

麦野「当たり前だろ、敵に泣けなんざかけんじやねえぞ」

フレンダ「了解!..」

涼音「御坂!..」は施設を壊して逃げるわよ!..

御坂「分かったわ!..」

一人は逃げる。

それを麦野たちは追いかける。

麦野「待てやクソガキイ！……勝負はまだついてねえぞ！！」

恐怖を感じながら逃げる。

そして、中心部分につく。

御坂はすぐに電撃で機械を壊す。

すると、麦野たちが追いついてきた。

フレンダ「こんなところに逃げ込むなんてね……結局、私たちの勝ちつて訳よ！」

麦野「死ね！！！」

涼音「しまつ・・・・！」

ドオオオオンツ！……！

「原子崩し」が一人を飲み込む。  
そのまま、機械ごと壊す。

麦野「やつたか……？」

フレンダ「死んでるでしょ。」の至近距離よ

麦野「帰るぞ。フレンダ」

フレンダ「了解！」

ちゃんと確認しないまま一人は帰る。

外に出ると、ほかの2人も待っていた。  
そのまま車に乗り込み、アジトに帰る。

麦野「・・・任務完了」・・・

元氣がない。

親友を殺したからだろう。

そうとは知らないフレンダは話す。

フレンダ「まあ、確実に死んでるでしょ。だって、アイツらの能力、

防御なんかできないし」

麦野「防御・・？ああつーーー！」

何か大事なことを思い出したようで大声を上げる。  
絹旗が耳を抑える。

絹旗「どうしたんですか？超五月蠅いんですけど・・・」

麦野「涼音の炎のこと忘れてた・・・ー！」

3人「え？」

御坂「いやー、アンタの炎が無かつたら死んでたわねー」

涼音「本当ね～。久しぶりにわくわくしたわ～」

そういう、二人は去つていく車を見る。

あの時、涼音が防御の炎を出したおかげで二人は死なかつた。

涼音「これで後一個？だつたら今度は麦野にも手伝つてもいいま  
しょうよ」

御坂「えつ？アンタまさか本当にあのおばさんと親友…？ひつー。」

涼音「麦野がおばさん？どの口が言つてるの？この口？」

御坂「ほめんなはい（めんなこ）」

謝つたので、頬をつねるのをやめる。  
そのまま、一人は帰つて行つた。

御坂「早く帰らないと……寮監に門限破りがばれる……」

寮監は規則を大事にする。

この前、黒子と一緒に遅くに帰つたら、黒子が犠牲になつた。  
しかも一発でだ。

御坂もそのあと一発でやられてしまった。  
もうあんなことはめんだ。

しかし、帰る途中、公衆電話を見つけた。

それをみた御坂は興味心でハッキングをする。

御坂「さて、どうなつたのかしら？」

壊した施設がどうなつているのか気になつたからだ。  
だが、画面を見た途端、御坂は機械を落とした。

御坂「何よ……この数……何でこんなにたくさん……」

そつ、後一つだったはずなのに、施設が増えていたのだ。  
あまりの数の多さに絶望する。

これをすべて壊そうとしたら何日もかかる。

今の自分はただ手さえ体力が限界だ。

御坂「なのに・・・なのに・・・」れじゃあ・・もし潰せたとしても・・

また増やされる・・・!・・・・・・・・・・・・

その場に座り込む。

このままではクローンが全員殺されてしまう。今でも、もうすでに9千以上は殺されている。

悩んだ後、御坂は涼音に電話をかける。すると、案外早く出た。

涼音「はいもしもし〜?誰かしら〜?」

御坂「・・・私よ・・・」

涼音「どうしたの〜?」

御坂「・・・いい?よく聞いてちょうどいい・・・」

御坂はゆっくり、丁寧に話す。

途中から声が震えていたが、涼音は何も言わなかつた。ただ黙つて聞いていた。

話終わり、涼音は何か考え始めた。

涼音「うーん・・・ビリジョウかしらー・・・」

御坂「アンターちゃんと眞面目にしなさこよーーそつしないとクローンが殺されるのよー!」

それを聞き、涼音のため息をつく音が聞こえる。  
せりに御坂は怒る。

御坂「アンタにとつてはどうでもいいことだけど、私にとつたら大  
変なことなの!!  
たとえクローンでも・・・あの子たちは・・・私の妹なの・・・!」

涼音「・・・・・どうでもよくないわよ・・・」

御坂「えっ? なんていったの?」

涼音「ううん、何もないわ。それじゃあ、御坂・・・死ぬ覚悟は  
ある?」

御坂「! ! ?

涼音「明日、あの人を止めるわよ。ただ止めるだけじゃダメ、あの  
人の意志でやめさせないといけないの・・・そのためには、大けが  
は絶対免れないわよ」

御坂「・・・分かったわ」

決意を伝えると、涼音の声は元のやんわりとしたものになる。

涼音「それじゃあ、麦野たちに伝えるわね～、貴方もあるツンツン頭呼んどいてね」

その人が居ればあの人技を無くせるから～」

御坂「分かったわ！ それじゃあ、明日の実験の時間の30分前に実験場所の○○に来て」

涼音「分かったわ～」

御坂「それじゃあ」

電話を切る。

そのまま御坂は走り出す。

一方、涼音は麦野たちにメールしていた。

涼音「麦野に～垣根に～削板ね～」

何かすごい人ばかり呼んでいた。

## 15・人じやない、人形

次の日、待ち合わせ場所に上条　当麻をつけ、御坂はいた。

当麻「オイ、ビリビリ。来るやつって誰なんだ？」

御坂「ビリビリいうな！！！　来るのは、第6位の静奈　涼音と、第4位の麦野　沈利よ。

言つとくけど！ レベル5が3人いるからって油断したら駄目よ！ 一方通行の能力はベクトル操作。反射もできるから、私たちの攻撃は効かない。

だから・・・」

当麻「オレの能力が必要・・・だろ？」

御坂「そうよ、アンタしかアイツを倒せる奴はないの。私たちはアンタを一方通行に近づけさせるための囮。感謝しなさいよ！」

当麻「分かった分かった・・・」

涼音「来たわよ」

手を振りながら涼音が歩いている。

しかし、後ろの人を見て、御坂は顔を青くさせる。

なぜなら、第5位以外のレベル5を連れてきていたからだ。  
垣根　かきね　帝督　ていとく　削板　そぎいた　軍霸　ぐんぱ　軍霸がいる。

あまりのすごさに御坂は口をパクパクさせている。

当麻「どうしたんだお前？酸素欲しがってる金魚みたいだぞ。イデ  
エ！――！」

御坂「誰が金魚だ！――！」

麦野「何してんのよ・・・」

二人の様子を見た麦野がつぶやく。

当麻が電撃を消しながら逃げ回るといつ光景が目の前にあるからだ。

涼音「え～と～・・漫才～？」

垣根「いやいや、それはねえだろ」「

削板「根性で耐えろ！」

当麻「無理です無理です！――！」

いまだに逃げ回る当麻。

そんな二人を置いて、涼音たちは話す。

削板「ずいぶん頼りになるって聞いてが・・大丈夫なのか・・？」

垣根「今はアイツにかけるしかねえ・・・一方通行の技はめんどく  
せえからな」

麦野「でも、頼りがあれじゃあね～」

涼音「まあ、大丈夫でしょ～」

麦野「・・・あんたいつも深く考えないわね～本当にレベル5～？」

垣根「移ってる移ってる」

話している間に、御坂は怒りが収まったのか、当麻が近づいてきた。そして、御坂にここに居る人たちがどういう人なのか説明する。説明を聞いて当麻は驚き、自分だけが無能力なのを嘆く。

当麻「くわいわう～、今の上條さん、超KYOUじゃないか・・・！」

削板「まあ、根性でがんばれ

そんな話をしているうちに、時間が迫ってきた。

すると、暗闇の中から一方通行が現れる。

一方通行はみんなをみえ、目を丸くする。

一方通行「な・・・なンでオマエラニヒテ・・・・・」

涼音「・・・実験をやめて・・・

一方通行「！～？」

麦野「アンタ馬鹿？人まで殺してレベル6になりたいの？私はなりたくないわ」

すると、一方通行は、小さくつぶやき、大声でいう。

一方通行「・・・なりたいンだよ・・・レベル6になれば・・・誰も傷つかない・・・涼音も悲しまない・・・だからだア！！！  
テメー等には関係ねエだらうがよオ！！」

御坂「その涼音がアンタがこんな実験してるって知つて悲しんでるのよ！～分からぬの！～？」

それを聞き、一方通行は涼音を見る。

涼音は目を閉じたままだが、悲しそうな顔をしている。

その表情を見て、一方通行は心を痛める。

しかし、ここで悲しんでも、この実験が成功すれば、この先ずっと

涼音は喜ぶ。

一方通行はそう考える。

一方通行「うるせH・・・邪魔するンだつたら殺すぞ！～！」

「何をしているのですか？と、ミサカは問いかけます

驚いて、声のする方を見ると、銃を持ったミサカがいた。

初めてクローンを見る、麦野、垣根、削板、涼音は目を見開いてみ

る。

涼音は目を閉じているが。

垣根「氣色悪いほど似てるな・・・」

削板「・・・でも・・・たとえクローンでも生きてる・・・一方通行！何でお前は人を何千人も殺してんだ！たとえ実験でも・・・！」

一方通行「うるせエ！・・・」「つらは人形なんだよオー！」

ミサカに向かつて手を挙げる。

いきなりのことにミサカは反応できず、ただ見ている。

それを見たみんなは声を上げる。

一方通行「死ねエええエッ！・・・」

涼音「やめて・・・」

当麻「やめひ――」

後少しでミサカの頭に触れるといづ、その時。

涼音「やめて――――――――――」

辺りを炎が包む。

## 16・自分が生まれたから迷惑をかける

全員「！？？」

皆は炎に囲まれる。

驚いている中、涼音の周りに二重くらい炎が囲み、髪が逆立ち、炎のようになります。一方通行に揺らめき始める。

一方通行は驚いて涼音を見る。

涼音は泣いていた。

涼音「何で……」  
「……こんなことに……私が悪いの……？私が化け物だから……！」

私が生まれてきたから……！」

一方通行「涼音……違う……オマエのせいじゃねェ！オレが悪いんだ！だからオマエは悪くねェ！」

大声でいう。

しかし、今の涼音は聞いていない。

徐々に炎の威力が上がり始めた。

一方通行以外は汗をかく。

麦野「涼音！いい加減に過去のこととは忘れない！いつまでうじうじしても駄目じゃない！」

涼音「過去・・・?・・・化け物・・・悪魔・・・う・・・うああああああつ――――――」

垣根「麦野——」（怒）

麦野「やばつ・・・」

**削板一火に油を注いだぞ！」**

説得するつもりでかけた言葉が逆効果になってしまった。  
さらに威力は上がる。

御坂「一方通行！アンタの反射でどうにかしてよー。」

一方通行「・・・無理だ・・・」

# 御坂「え？」

一方通行「何でか分からねエけど、涼音の炎は熱さは反射できても  
炎は反射できねエンだ・・  
オレじゃア止められねエ・・・・」

当麻と御坂は驚き、声を無くす。

ミサカ「では、その少年の能力は効かないんですか?」と、ミサカ

は疑問に思ったことを訪ねます

垣根「それだ！おい、クソガキ！お前がこの炎を消せー！」

当麻「ガキ！？・・・まあいいけど・・・・・」

涼音を囲んでいる炎の前に立つ。

後ろでは麦野がキレだし、垣根と削板が必死に止めている。

当麻「オラアッ！-！-！」

右手を広げて炎に触れる。

キィイイインッ

御坂「やつた！」

「幻想殺し」は効き、炎は消えた。

涼音は目を見開き、涙を流しながら驚いていた。  
しかし、顔は下に向けている。

そして、またつぶやき始めた。

涼音「私が化け物だから・・こんな容姿で生まれたから・・・悪魔  
だから・・・こんな性格だから・・  
だから一方通行を苦しめた・・・だから一方通行に迷惑をかけた・・  
・  
私なんか生まれなきやよかつたのに・・そうしたらお母さんもお父  
さんも一方通行にも迷惑も心配もかけなかつたのに・・・そうし  
たら・・・」

頭を抱え、目を見開き、涙を流しふしふやき始める。  
そんな涼音を一方通行は抱きしめる。  
いきなりのことに涼音の体が固まる。  
一方通行は抱きしめながら囁く。

一方通行「いいか? 涼音」

涼音「・・・うん・・・・」

一方通行「オマエは自分が生まれてきたから母親と父親とオレに迷  
惑と心配をかけたと思つてるな?」

涼音「・・・うん・・・・」

一方通行「・・だけどなア、オレはオマエが居なかつたらここのは  
いねエかもしけねエ、あのまま化け物呼ばわりされて一人で死ンで  
たかもしけねエ」

涼音「そんなことツ・・・! 無い・・・一方通行は強いから・・・!

私と違うから……！」

一方通行「オレはオマエが思つてゐるほど強くねエ！・・もし一人だつたら学園都市に行くつていウことを言われても行くつて言わなかつたかもしけねエ・・・

オマエが居たからオレは来たんだ。それに、オマエはオレを助けてくれた

涼音「それは・・・」

一方通行「ありがとなア」

涼音「！・・・・・・」

一方通行に抱き着き、静かに泣き始める。

皆は二人だけにしようと離れたところで話を聞いていた。

垣根が面白そうに笑う。

垣根「お熱いね～、今度これでからかつてやろう」

麦野「はあ～私も彼氏欲しいー！」

垣根「お前の性格じや無理だろ」

麦野「なんだぞ！」アアアアアアアアアアツ――――――

垣根「ギヤー――――――嘘嘘――だから「原子崩し」撃たないで

――――――

麦野「死ねえええええっ！……」

能力を使い、必死に逃げ回る垣根。

それを追いかける麦野。

皆は笑いながらその光景を見る。

途中で垣根が助けを求めていたが、聞こえないふりをした。

すると、一方通行が涼音の手を持ちながら帰ってきた。

一方通行「面白うなことしてンじゃねーカ。オレも混ざろー。」

垣根「混ざくな！！ギヤー！！もの飛ばそいで！！！」

麦野「アッハアー！なかなか面白いじゃねえかこの遊び！」

垣根「オレは楽しくねえよ……」

削板「がんばれ！何事も根性だ！」

垣根「それはオマエだけだ！」

当麻「・・命がけの遊びだな」

御坂「いや、垣根は遊びじゃないわよ

涼音「ふふ、元気ね～」

目を真っ赤にさせながら涼音は笑う。

ミサカ「さつき思つたのですが、貴方の目の色は炎のようで綺麗でした、と、ミサカは思つたことをそのまま言います」

涼音「私の目・・・こんな人はいずれの目の色が・・・？」

御坂「人と違うから綺麗よ？一方通行は血の色みたいな色だけど、貴方は炎みたいで綺麗よ」

涼音「・・・そうなの？」

一方通行「オイ、オレのことけなしてるのか？」

そういう、目を開ける。

すると、残りの人たちも綺麗だという。

それを聞き、涼音は笑う。

涼音「私は、この赤い髪と目で化け物呼ばわりされたの・・・綺麗なんて言われたの2回目よ」

削板「一回目は誰だ？」

涼音「一方通行よ」

当麻「なんだよお前！」、そんなにグフツ――！――

一方通行「黙つてろー！」

麦野（素直じやないわね・・・）

垣根（こんなのがじや、ここつ一生垣根できないんだ）

削板（根性で垣根だーー）

御坂（へタレ・・・・？）

当麻（わかんねえな・・・好きなら好きつていえばいいのこ・・・）

ミサカ（へタレですか、と、ミサカは馬鹿にしながら思います）

一方通行（絶対全員変なこと考えてるな・・・）

涼音（あらあら～、みんな一方通行見てるわね～なぜかしら～？）

それぞれそんなことを思つていた。  
そんな中、涼音があることをいつ。

涼音「・・あなたたちだと過去のこと言つてもいいみたいね～  
時間ある～？」

御坂「時間？あつーやっぱー私帰らないとーー。」

涼音「じゃあ、明日10時にまたここきてね～」

御坂「分かった！」

全速力で帰つていいく。

そのあと、みんなも帰つてい行く。

ミサカ「・・・実験はどうすればいいのでしょうか？」

一方通行「ああ、オレは無能力者にやられた、とでも言つてやる」

ミサカ「分かりました」

ミサカも研究所に帰つていいく。

一方通行と涼音も明日のことについて話ながら帰る。

## 17・つらい過去

次の日、皆は実験していたところで集まっていた。  
涼音と一方通行は一番に来て、何やら話しあっていたが、みんなが  
来ると話をやめた。

当麻「来たぜ」

涼音「まあ、立ちっぱなしは疲れるからその辺に座つて～」

そういうわれ、座る。

御坂と当麻以外は悲しそうな顔をしている。  
それをみた御坂と当麻は悲しい話だと分かる。

涼音「それじゃあ「オレから話す」・・アナタが・・？」

一方通行「オレの方がましだからなア」

涼音の言葉を遮り、何やら話すと、話始める。

一方通行「・・オレは・・・生まれたときは普通だった

御坂「そうでしょうね」

一方通行「だがなア・・・歳をとる」と『オレ』の能力は強くなつていつた。

そのせいで、オレは普通じゃなくなつた

当麻「たとえばどんことだ? 触ひつとしても触れないとか?」

一方通行「あア、それもあるなア・・・それならまだ触らせないようすればいい話だア。」

まだましだ。問題はその後だ

眉間にしわを寄せ、空を見る。

この先は思い出したくもない、だが、言つた方がましだろう。

一方通行「・・ある日、いじめっ子どもがオレの外見が変だつていうくだらね理由でいじめようとしてきやがつた。オレは何もせずにオレを殴りうとする拳を見てた。そしたらそいつの腕は折れ曲がつた。  
・・オレは初めて人を傷つけたんだ・・・」

垣根「・・・」

削板「・・・」

一方通行「そのあとも、一人がオレに体当たりをしてきやがつた。もちろん吹っ飛んだがなア。」

いじめっ子どもは逃げながらオレにこづか言つた・・・『化け物』つて・・・

御坂「化け物……？そんなこと言つたの……？」

当麻「でも！学園都市なら有りだろ！？能力持つてんのは……」

一方通行「オレが生まれたところは普通の所だア。能力者なンかいねエ。

だからオレはそういうわれたんだ。

そのあとはそいつらの大人が来てなア。オレを殴ろうとした。やつぱり手は折れた。遂には警察を呼ばれた。

だけど警察も歯が立たなかつた。オレは人を傷つけ続けた」

当麻（・・・一方通行は人を傷つけたのを後悔してるんだ・・・『化け物』って小さいときに言われればいくら一方通行でも傷つく・

・  
酷いやつらだな・・・！）

知らない間に手に力を込める。

いくらなんでも、子供相手に『化け物』はひどすぎる。

一方通行「ついには軍隊も動いた。だけどオレに傷はつけられなかつた。

銃も・・ミサイルも撃たれた・・・オレは必死に逃げ回つた。

ビルに逃げ込んだがアこのまま死ぬンだと思いながらオレは座り込んで・・・

その時だ、足音が聞こえたのは

御坂「・・誰だつたの？軍隊だつたの？」

一方通行「イヤ、涼音だ」

御坂・当麻「！？？」

一人は驚く。

当たり前だ、そこで涼音の名前が出てくるとは思わなかつたからだ。  
一方通行の顔は少し和む。

一方通行「涼音はオレを助けてくれた。

オレを学園都市に連れていいつてくれたので救つてくれたんだ。

本当に感謝しても感謝しきれねエよ」

笑つて いるような顔で話す。

本当に感謝をして いるのだろう。

もう少しで死にそうだったのを救つてくれたのだから。  
すると、次は私ね、といい、涼音が話をする。

紅い、炎のような瞳を見せながら。

涼音「そうね～・・私は生まれたときから変だつたわ。  
何せ、この赤い瞳と髪だからね。最初は驚かれたわ。  
だけど、その時は突然変異だつてことで収まつたの。  
暫くの間は普通のことも遊んでたわ」

でも、といい、下を向く。

涼音「幼稚園から私は同じ年の子には遠ざけられるようになつたの。

「炎の生まれ変わり」、「変な子」って言われたわ。

だけど、それくらいだつたら私は気になつた。炎の生まれ変わりつて何かカツコイイじゃないとか思つてたから・・・だけど・・・小学校3年から・・・あの・・・いじめが始まつた・・・！」

消えそなが細い声になる。

その途端、垣根たちが止めに入る。

垣根「もひやめろー！」

麦野「そうよ、つらいんなら言わなくていいのよ?だから・・・」

涼音「ありがとう・・・でも大丈夫・・・」

二ツコリと微笑むが、大丈夫そんではなかつた。

涼音「・・・いじめはひどかつたわ・・・階段で突き飛ばされたりした

わ・・・

先生たちは何とかやめさせようとした・・・だけど無理だった・・・

暫くすると無視をされるようになつたわ。

私が渡しても受け取つてくれなくなつたり渡してもくれなくなつたわ

涼音の瞳から涙が零れ落ち始める。

涼音「机を外に出されたり・・・教科書には落書きをされたり・・・

私はそのころから人が恐くなったり・・・喋ることを忘れようとした・・・

・・・4年生になって・・・私はとうとうクラス全員に囲まれて殴られたり蹴られたりされたわ」

御坂「そんな・・・・・ひどいすぎるじゃない！・・・」

涼音「そういうても私は話すのが恐かったの・・・ただ黙つてやられてた・・・

だけど、我慢できなくなつて叫んだわ。そしたら頭に演算が浮かんだの。

私の手からは炎が出てきて、ほかの生徒は悲鳴を上げて逃げたわ。

『化け物』、『炎の魔』って・・・私は思つた・・・

何で私は生まれたの?なんで私は生きてるの?私なんか生まれなきやよかつたのに・・・

こんな『化け物』なんかつて・・・!」

当麻「そんなことを・・・」

涼音「私は自分を責め続けたわ。味方だと思ってた先生たちもついに敵になつた・・・

私は味方はいなくなつた・・・

・・・さらにいじめはひどくなつて、私は炎を押し付けられたり、屋上から落とされそうになつたりした。

私は我慢できなくなつて、また演算をしたわ。

そしたら、炎を持ってた子の腕は燃えた。

急いで先生が消したけど、その子の腕には一生残る火傷ができた。

先生は私を叱つた。

だけど・・私は何をしていいのか何をしてはダメなのかわからなくなつてたの・・

先生を炎で包んだわ・・

自分の手を見る。

なぜあんなことをしたのか自分でも分からぬのだろう。

麦野が優しく涼音の背中をなでている。

涼音「私は逃げ帰つたわ・・そしたら、お母さんとお父さんが私を抱きしめて迎えたの。

そしていつたわ、「逃げなさい」って・・  
私は同情してくれた人たちに連れられて学園都市に向かつた。  
その途中、私は一方通行のことを知つたの・・・  
自分と同じ目にあつてる人を、私は助けたかつた・・・  
私は一方通行を助けにいつた。

会つて、私は白い髪に赤い目の一 方通行を見て驚いたわ。  
自分と同じ子がいたから・・

そのまま私は一方通行を連れてここへ、学園都市に来たの」

笑うが、悲しそうだ。

御坂と当麻は泣いている。

まさかそんなにつらい過去とは思わなかつた。

当麻「そつか……お前ら……つらかったんだな……！」

御坂「本当……」

しかし、まだ続きはあると一方通行はいつ。

## 18・合わせて・・出して・・

一方通行「オレ達は学園都市に来た後、直ぐに研究者たちに田Hをつけられた。

そのまま研究所に連れて行かれ、別々に実験した。

あの時オレは小さかつたからなア。寝床と食料があればイイと思つてたンだよ・・・」

涼音「・・・ひどかったわ・・・注射は何回も打たれた。薬も何回も飲まれた。  
・・・いうことを聞かないと殴られた・・私は無表情で・・・何も喋らはずただ耐えた・・」

――――――

涼音「ねえ、なんで一緒に黙田なのー?あの子と一緒に居たいよー!ー!ー」

「ダメだ、能力が違うから別々だ」

涼音「いやだ!一緒にいいー!つー!」

「つるむせーーそれ以上騒ぐともう一発殴るぞー!」

涼音「・・・・・」

殴られた頬を触りながら一方通行の方を見る。

一方通行の方は反射があるので殴られることがないし触れる事もできない。

そのため、研究者を押しのけて近寄ってきていた。

涼音を庇うように前に立つ。

一方通行「涼音をいじめたら殺す！」の建物も壊してやる！」

「はっ！ガキが調子のんな！！」

見下した目で一人を見る。

二人は負けじと睨み返すが、涼音が後ろから抱きかかえられ、連れ  
て行かれる。

涼音「いやだ！放して！！！」

一方通行「涼音・・・！」

「このまま大人しく実験すれば殴つたりしねえ。できないんなら出  
ていきな」

一方通行「チクショオ！！！」

悔しくて壁を殴る。

すると、壁は大きくへこむ。

それをみた研究者たちは驚きの声をあげる。

ここを追い出されたら子供一人では生きていけない。  
だから「う」と聞くしかない。

それから毎日、地獄のような日々だった。

一方通行「イテツ！」

今日も注射を3本打たれた。  
点滴もしている。

これは毎日された。

他にも、銃やマシンガンを撃たれたりしたが、すべて反射した。  
より複雑な演算もできるようになつたが、暴れられない。  
涼音が殴られるからだ。

この前、ちらつと見たが無表情だった。  
自分と違い反射が出来ない涼音は殴られる。  
そのため、言つことを聞かないといけない。

涼音「痛い・・痛いよう・・死にたいよ・・・・」

「つるさーーー！」

涼音「・・・・・！」

殴られ、必死に痛みに耐える。  
しかし、涙を流し、ついつい言つてしまつ。

涼音「・・死にたいよ・・死にたいよ・・」ここから出しても・・・  
あの人にはわせて・・・

「ハツ！そんなこと知らねえな！オラ立て！」

無理やり立たされる。

抵抗もせずに立ち上がる。

もう、抵抗する気力がない。

黙つて研究者の跡をついていく。

数年後

一方通行「よオ、久しづりだなア 涼音エ」

涼音「・・・・・」

久しぶりに自由時間が与えられたので涼音に会いに行く。  
しかし、涼音は冷たい目でこちらを見るだけで何も言わない。  
部屋の隅で体育座りをしながら寝るらしいと、この前研究者たちが  
話しているのをこっそり聞いた。

一方通行「・・・なんか言えよ。久しぶりなのによオ・・・

涼音「・・・・・」

そういうても何も言わない。

もう生きている人形のようになってしまっている。

一方通行「・・・考えたんだけ冬ア・・・」  
「」から出ね冬か?」

涼音「・・・・・?」

ほんの・・ほんの少しだけ反応する。  
しかし、すぐに目をそらす。  
めげずに顔を掴み、無理やりこっちを向かせる。

一方通行「なア。出よウゼ。もつオレ等は中学3年の歳だ。生きて

いける「

涼音「・・本当・・?」

やつと・・数年ぶりに涼音の声を聞く。  
優しい、やんわりとした声が。

一方通行は首を縦に振り、手を取りたたせる。

一方通行「じゃア、置手紙書いてくか!」

涼音「・・・うん・・・

ニッコリと微笑む。

その微笑みにドキッとし、顔を赤くしてしまい、慌てて顔をそむけ、歩き出す。

一方通行「おつ・・・あおおうウー行くぜーー!」

涼音「・・・ありがとう・・・・・」

小さくお礼を言つ。

そのあと、置手紙を書き、机に置く。

そのまま、窓から飛び降りる。

地面に着地すると、一人はすぐに走り出した。

一方通行「てHことがあつたんだ。そのあとはいろいろ苦労したぜ。まア、実験のおかげで金はたっぷりあつたからな、それで直ぐに家を借りた。

そのあとはお互い別々の高校に行つたからな、それアポートを借りて高校行つてた」

涼音「そのあと、私は一方通行が心配になつて帰つたの～」

一方通行「本当大変だつたぜ。こいつ、無表情だったからな」

お氣楽に言つが、周りは何も言わない。  
そのうち、削板が腹が減つたと言いだし、みんなは黙りながらご飯を食べに行く。

## 19：焼肉

削板が来たいといったので、みんなは焼肉屋に來ていた。

今は昼のため、御坂は太るやら何か言ってたがみんなは見事にスルーした。

五月蠅くなりそなので、特別室にしてもらつた。

削板「赤身2人前！！」

麦野「そうね・・・」

涼音「あつ、塩タンでいいんぢやない？ 塩タン2人前！」

垣根「オレはカルビ2人前」

一方通行「イヤ、3人前」

垣根「オレと一緒にすんな」

一方通行「ケチケチすンぢやねエよ。器が小さいですね～」（笑）

垣根「殺す！――！」

麦野「喧嘩してんぢやねえ！――！」

ゴンツ × 2

一方・垣根「イデツ！！」

拳骨のあまりの痛さに2人は頭を抱え、声にならない叫びで転がる。

当麻「うう～～・お金は割り勘ですか・・？」

御坂「安心しなさい。アンタのは私が払つてあげるわよ。じゃあ、ホルモン1人前と・・

アンタはハラミでいいわね？ハラミ1人前」

当麻「マジか！？アリガトウ！」ぞいます女神様～」

御坂「ばっ／＼／＼／＼／＼離れなさいーー！」

嬉しさのあまり抱き着いた当麻。  
いきなりの行動に、御坂は顔を真っ赤にさせて離そうとする。  
皆はジーとみている。

そのため、もつと顔を赤くして言い訳をし始める。

御坂「べつ・・・別に私はコイツのことなんにも思ってないわよ  
！？分かってる！？  
かつ勘違いしないでよね！」

麦野「若いわね」

涼音「そうね～」

削板「若い！若いなあ！」

垣根「…オレも心から愛してくれる人欲しい…一方通行はいいなあ…」

一方通行「なつ／＼／＼＼＼＼うるせ～何勘違いしてんだ！」

「あつ・・あの～？これで以上ですか？」

全員「ハイ」

「あつはい～それでは・・・」

大慌てで出ていく。

そのあとも騒ぎまわる。

麦野「とつたあ！！」

御坂「ちよつとおばさん～！～それ私の～」

麦野「誰がおばさんだゴラ～～これはとつたもん勝ちなんだよ～」

垣根「は～とつた～」

削板「これもこれも全部オレの」

騒ぐ4人。

残りの3人は別の机で静かに、争いもなく食べる。

涼音「美味しいわね～」

当麻「焼肉なんかしたの久しぶりだ～たくさん食べよ」

一方通行「あそこの争いには入れないよなア・・・・」

4人のところは戦場みたいになっていた。

巻き込まれないように3人は気よ付けながら食べる。

――――――

削板「はーーお腹いっぱいだ！」

垣根「畜生・・・全部オレに払わせやがって・・・！」

一方通行「コーヒー買つてこ」

涼音「本当に好きなのね～」

## 20・消れなきや、壊される

私ね、真っ白な少年に恋をしたの。

研究所で。

でも、彼は私を見てくれないの。

こんなにあなたのことを見てるのに。

少しくらいこじらかを向いてくれてもいいのに。

なのに、彼は違う女性ばかり見ていたの。

私はこの天才的な頭脳で無理やり兵器とかを考えさせられていたわ。

でも、私の頭脳は物を作るときにしか役に立たない。

彼女は私と違つて炎が出せた。

それだけじゃない、私より綺麗だった。

高嶺の花みたいだった。

私はそこいら辺の女、花と一緒に。

並みの男では触れることさえ出来ない花。

でも彼は、振り向いてもらうために必死に触つてたの、自分で気づかぬうちに。

研究所に来たとき、同じ年の彼は、大人びた顔をしていた。

私はその顔をみて惚れたの。

その時から、彼と一秒でも長くいたかったからいろいろ作戦をしたりして、

出来るだけ一緒に、振り向いて振り向いてもらえるようにしたの。  
でも、振り向いてもらえなかつた。

時々・・ほんの時々しか会えない彼女を見てばかりだつたの。

寂しかつた、彼女が憎かつた。

ある日、彼は置手紙を置いて逃げ出したわ。

私はその手紙を呼んで絶望した。

「こんな、楽しくない」というのは出でこべ。

実験できてよかったですな」

つて、なんで私のことが書いていないの?

私のことなんか覚えてないの?

何である女を連れて行つたの?

おかしいよ、だつて私の方が絶対に長い間そばにいた。

なのに、なんである女なの?

酷いよ・・・酷い。

私は長い間そばにいたよ?

そんな女より長い間そばに・・・

なのに・・・

何である女なの?

その日から私は変わった。

ただ毎日、女を殺すことばかり考えてた。

そうよ、そうそう、私の方が彼に相応しいの、だからあの女はいら  
ないの。

・・・選れぬ世を・・・

赤い糸でつながつてゐる私たちの邪魔をされちゃう。

殺されなれや・・一秒でも早く・・どんな手をつかってでも殺されなれや・

邪魔される・・私たちの幸せが壊される・・

あんな「化け物」のせいで壊されたくない、あの「化け物」は消さないと。

死んじゃえばいいのに

! . ! . ! . ! . ! . ! .

・・消えて・・・・！！！

今田も私は同じことをする。

「ピーチーしたあの女の写真を切り刻み、藁人形を打ち、  
体を鍛えてあの女を殺すために銃の練習をしたり・  
そんなことを毎日続ける。

だつて、私たちの幸せを守るためにもん。

・・神様は許してくれるよね？

だつてあの女が悪いんだから・・ね・・・

## 21・ダイヒト

御坂「だ-----せひぱつ-----」

御坂の大声が風呂場に響く。

慌ててどうしたのかと黒子が見に来る。

黒子「おっ・・お姉さまー・・じひなさこましたのー?」

御坂「黒子・・・」(涙)

黒子「なぜ泣いていらっしゃいますの?何が嫌なことがありますたのー?」

御坂「太つた・・・」

黒子「・・・は?」

そう、御坂は体重が増えたことで大声を上げたのだ。  
男子なら別にどうでもいいと思つが、女子は違つ。  
少しでも増えれば一大事だ。

御坂「やつぱり原因はこの前の焼肉よ・・・一晩間から食べたし、

たくさん食べたし・・・・

だ――――――やばい――――――

黒子「・・・それでダイエットなさればいいのでは?  
甘味を減らしたり、走つたりなど」

御坂「アンタね・・・今もギリギリ減らしてるのでー。  
それにいつもあの馬鹿追いかけまわしてそういう簡単には体力はキレないし・・・」

黒子「あら・・まあ・・・・」

黒子はただ茫然としているしかなかった。

などと言つメールのやり取りをし、二人は御坂の寮のパソコンでダ  
イエット方法を調べていた。

いいものはメモし、終わったとは早速やり始める。

涼音「まずわ〜・・体を柔らかくすれば痩せやすい体になるつてい  
うやつね〜」

御坂「そうね、でも私結構体柔らかいわよ?」

涼音「まずはやりましょ〜」

御坂「ええ、フー」

足を大きく開き、前に倒れしていく。

そして、後もう少しでつぶとつぶで止まり、戻る。

御坂「今のが私の限界よ」

涼音「もうちょっといくんじゃないの〜?おりや〜」

御坂「ちよつ!無理やり押すな!いで!ホントに無理無理無理

-----」

ボキッ

涼音・御坂「あつ」

直ぐに御坂に壮絶な痛みが襲い掛かる。

涼音「相撲さんとかは最初は今みたいにして体を柔らかくするらし  
いわよ~」

御坂「私は相撲じやない！！！痛――――――――――――――――――――」

暫くのた打ち回る。

御坂が痛みで苦しんでいるにも関わらず、涼音はいつものように車を閉じ、二二二としたままだ。

痛みがやつとなくなると、体は前より柔らかくなつてゐた。

御坂「後で顔貸しなさい」

涼音「一めせこ」

御坂「つるさい！顔が駄目なら私を同じ痛みを味わえ！！！」

涼音「あらあら～」

御坂「……なんで柔らかいのよ……」

思いつきり前にしたのだが、涼音は簡単にペッタリついてしまふ。聞けば、毎日体を柔らかくする運動をしているといった。ギヤーギヤー騒ぐ御坂を無視し、涼音は外に出ようと、ドアに手をかけ、開ける。

すると、顔に向かつて植木鉢が飛んできた。  
とつせに炎で焼き尽くすが、前を見ても誰も居ない。

御坂「……何なの？さっきの」

涼音「……分からぬわ～、でも、大丈夫だったからそれでいいじやない」

御坂「ホント……呑氣ね……」

涼音「まあまあ～、それじゃあ、続きしましょ～」

御坂「あつー待ちなさいよ！」

慌てて後をついていく。

二人が見えなくなつた後、いきなり壁から出てきた一人の女性が舌打ちをする。

「失敗したか・・まあいいわ、どうせ殺すんだし・・それに次の作戦をすればいいし・・・絶対に殺してやる！！」

憎しみの顔で一人が去つて行つた方向を向き、そのまま歩き出す。

## 22・爆発

涼音は、いつも通りにお気楽そうにしていたが、真剣にやつしのことを考えていた。

涼音（誰もいなかつた・・・瞬間移動か・・・偏光能力か・・・どちらにしよ、何かの能力を持つているのは確かね・・・どうやら私を狙っているようだけど、なぜ？）

今まで私は何かをしたことがあつたかしら・・・

考えるが思いつかない。

外にいたときは周りは敵だらけだつたが、わざわざ「化け物」と認識している自分を殺そうとするはずがない。自分が死ぬかもしれないからだ。

実験の時もない。

あの時は誰とも話をしなかつた。

ただ淡淡と言わたることを人形のようににしてきただけだ。実験の後も、あまり人と接していない。

こんな性格になつたのは1年前のことだ。

涼音（誰が・・・）

御坂「あつ、ねえ、あの服可愛くない？」

涼音「どれ〜？ブツ〜！」

指された服をみて吹き出す。

なぜなら、子どもっぽい服だったからだ。  
意外な趣味に笑いだす。

笑われて御坂は顔を真っ赤にする。

御坂「なつ・・・！何笑ってんのよー！」

涼音「ごめんなさいねー・・・だって子供っぽい服だったから・・・  
アハハハハツ！！！」

御坂「・・・五月蠅い五月蠅い！べつ別にいいじゃない！好きなん  
だから！」

涼音「ひー・・・ふふ・・・・ごめんなさいねー  
でも、趣味は変えないでいなさいよー？」

御坂「・・・なんで？」

涼音「だつて、それがアナタじゃない。人に言われて口口口口変  
えてたら自分らしさが無くなるわよー？」

御坂「そういうわれればそうね・・・

そうよね、人に言われても気にしちゃダメよね！だつてこれが私だ  
もの！」

涼音「そりやー、あつ、じゃあこれは好きー？」

御坂「どれどれー？・・てつ！アホかー！」

持っているのは明らかに5歳くらいのこの服。  
着れるはずがない。

しかし、涼音はさつぱり分からぬといふような顔をする。

涼音「おひるひ～、さうじんひ～？」

御坂「サイズをみなさいサイズを！絶対着れないわよー！」

涼音「ああ、そういえばそうね～。じゃあ一いつ切ち～？」

御坂「…………今度はでかすぎ…………」（怒）

わざとかと思つぱり、今度はでかすがれ。

「二二二笑顔でもとに戻す。」

**御坂（天然！？めっちゃ天然なの！？それともわざと！？）**

涼音「わいわい、じゃあ～」

御坂がそう思つているとも知らず、涼音はまた選び始める。手に取つてるのは全て明らかに小さい服だ。  
もはや怒りを通りこしてあきれる。

諦めてそばに行こうとしたその時、後ろがいきなり光る。

御坂「え？」

涼音「危ない！……」

見ると、爆発の炎がすぐ目の前にあつた。  
そのまま、御坂の意識は途切れた。

――

プルルル・・・プルルルル・・・・ピッ

めんどくさうに、携帯電話の持ち主、一方通行は出る。

一方通行「なんだよクソメルヘン・・・

垣根「酷い！・・・じゃない！急いで来い！涼音と第3位が・・・！」

！爆発に・・・！」

いきなりの「」と、頭が真っ白になつたが、すぐに戻る。

一方通行「・・・・！…どこの病院だ！…」

急いで病院の名前を聞き出し、能力を使い急いで向かう。

――――――

ピッ・・ピッ・・・ピッ・・・

ガラフ！――

息を切らせて一方通行が病室に入つてくる。

そして、病室の中みて息をのむ。

包帯を巻いている涼音の手を、つつむつむじで御坂が握っていたからだ。

きっと泣いているだろう。

先に来ていた3人も悲しそうな顔をしている。

ヨロヨロと、涼音に近づく。

いつものように目は閉じていた。

しかし、体のいたるところには包帯が巻かれ、点滴も打たれている。暫く睡然としていると、カエル顔の冥土返し（ヘヴンキャンセラー）が病室に入ってきた。

直ぐに一方通行は状態を聞く。

一方通行「オイ！ どうなンだ！ 涼音の様態はア――！」

冥土返し「・・・危険な状態だね。そこで泣いてる子を爆発から守るために自分を盾にしたんだね。

とつさに能力を使つたみたいだけど、やっぱり簡単な演算しかできなかつたみたいだね？

直ぐに盾は壊れたみたいだ

泣きそうな顔をしながら、麦野は聞く。

麦野「・・・死ぬかもしれないの・・？」

冥土返し「今は何とも言えないね・・・ただ、危ない状態なのには変わりないね

垣根「そんな・・どうにかしてくれよーアイツは闇にいる俺たちを普通の人のように接してくれたんだ！  
なんとかしてくれよ！」「

泣きそうな顔で言つ。

もう戻れない光の世界。

そんな世界に住んでいる涼音は、光とは逆の闇の世界にいる自分たちを普通の人のように接してくれた。正体を言つても、変わらなかつた。

涼音が居なかつたら、3人は闇の中でただ寂しく一生を過ごしていただろう。

しかし、冥土返しはせらつと言つ。

冥土返し「できる限りはした・・あとは彼女しだいだ・・」

そういうと、出て行つてしまつた。

残つた5人は何も言わない。

すると、御坂が震える声で謝りだした。

## 23・オマハのせいだ

御坂「……」め・・・んなさい・・・私の・・・せい・・・

麦野「……アナタのせいじゃないわよ。涼音が自分で・・・」

それ以上は言えない、言つたら涙が零れ落ちそだからだ。

自分の身を犠牲にしてでも友達を守ろうとした親友の涼音を『自分で勝手に傷ついた』などと言いたくない。

しかし、麦野の声が聞こえていないのか、御坂は言葉を続ける。

御坂「私が・・・私が逃げてれば・・・!私があやなんか誘わなかつたら・・・  
私がいなかつたら・・・!・・・静奈さんは・・・怪我なんかしてなかつた・・・!」

一方通行「……そうだ・・・お前がいなかつたら涼音は怪我をしなかつたンだ・・・!  
テメーのせいだア!-!-!」

それまで下を向いて黙っていた一方通行がいきなり大声を出す。

御坂「・・・・・・」

垣根「一方通行!-!」

削板「人のせいにするのはやめろ…こいつが悪いわけじゃない！」

急いで垣根と削板が止める。

しかし、一方通行は止まらない。

さらに言い続ける。

一方通行「オレは絶対に許さねエ…死んでも許さねエ…！」

麦野「一方通行…人のせいにしてんじやないわよ…！」

御坂「…ごめんなさい…！」

麦野「アンタも謝らなくてもいいのよ…！」

3人が必死に止めようとしてるうちに、一方通行は出て行ってしまった。

御坂はずっと涙を流して涼音の手を握り続ける。

そんな御坂の頭を、削板は手を置いてなでる。

予想していなかつたことに、御坂は体を固める。

削板は気にせず、笑う。

削板「大丈夫だ…お前のせいじゃない。悪いのは…お前たちを狙つたやつだ…！…！」

御坂「狙つ・・・た・・・?」

垣根「ああ、そんな何もないところが爆発するはずがない。  
誰かが命を狙つてんだ」

麦野「もし見つけたら肉片も残さずに消し飛ばしてやらあ・・・」

削板「ここに鬼がいるぞ」

御坂「・・・あつ・・・」

いきなり御坂が大声を出したので3人はビックリして動きを止め、  
御坂を見る。

そんなこと気にせず、御坂は話し出す。

御坂「そうよ・・・！そういうえば私たちがジムから出たときも静  
奈さんに向かつて植木鉢が飛んできたのよ・・・！  
絶対誰かが静奈さんを狙つてる！――」

麦野「・・・思いついたのはいいけど、顔を拭きなさい。グシャグ  
シャよ」

御坂「あつ、うん」

ハンカチをもらい、顔をふぐ。  
3人は考え込む。

削板「もし本当なら危ないぞ・・殺される」

垣根「そなうならねえように俺たちが守らないとな

麦野「犯人はブチ殺し確定よね・・・絶対ブチ殺す！――！」

削板「恐い・・・」

垣根「ホントだ・・・」

その時、涼音の手が動く。

御坂「！・静奈さん！？」

涼音「・・・ここは・・・？」

麦野「気が付いたのね・・・よかつた・・オイ、何してやがる。さつさとあの力エル医者呼んで来いよ使えねエ野郎どもだなオイ！――！」

急いで垣根が呼びに行く。

涼音は消えそうなか細い声でいろいろ聞いてくる。

涼音「・・・御坂は・・？大丈夫・・な・・の・・？」

・ 御坂「…………う…………ん！……私は大丈夫！軽いやけどだけ…………」

・ ゴメンナサイ……静奈さん…………」

涼音は笑顔のままだ。

涼音「あらあら…………アナタのせいじゃないわよ…………私が狙われてたから…………こんなことになつたんだから…………・・・あの人は…………？」

削板「あ…………オマエが傷ついたのがよっぽどショックみたいだ…………」

・ 御坂のせいだつて言つて出て行つた…………」

涼音「そつ…………後で話を…………しておくれ…………」

垣根「オイ！連れてきたぜえ…………！」

ド「ゴッ（顔面パンチされた）

麦野「うるさいんだよ！涼音は怪我してんだゴラ…………ブチ殺すぞ  
オイ」（パンチした）

垣根「すっ…………すみません…………（オレの扱いひどくね…………？）

「

冥土返し「すゞ」回復力だね・・予想外だよ。  
だけど、もうじきは安静にしておくんだね

涼音「ええ・・・そうする・・わ・・・ズズズズ」

御坂「・・」のタイミングで寝るの?」

冥土返し「仕方ないよ。体力はまだ回復していないからね。  
話すのがやっとさ。この回復力なら、あと一週間ぐらいで退院でき  
るね?」

自分の能力のおかげかな?

無意識のうちに能力を使っているようだね。

それじゃあ、僕はいくね」

そういうと、冥土返しは出て行った。

涼音の規則正しい寝息だけが聞こえる。

## 24・分からぬ

垣根「……ちょっとオレ、一方通行探していくるー。」

削板「あつ、じゃあオレも」

麦野「私も行くわ」

御坂「じゃあ……私も……」

麦野「アンタはここに居なさい」

御坂「……」

直ぐに止められる。  
やつぱり、私のことを許していないのだつと思い、下を向く。

御坂（……そうよね……親友を傷つけた私のことは憎いわよね……）

削板以外の垣根、一方通行、麦野は闇で生きている。  
なのに、光の世界の涼音と一緒に居るのだ。

親友以上に大切にしているのだろう。

一方通行にしては幼馴染より大事な大事なたつた一人の家族のよう

なものだろう。

その親友を傷つけたのだ。

許すはずがないだろうと、思い、涙を流す。すると、頭に温かい手が置かれる。

麦野「何泣いてんの。大丈夫よ。私達はあなたのせいにはしない。言つたでしょ？悪いのは涼音を狙つてるゴミ野郎。だから自分が悪いなんて思わないの」

御坂「・・・うん・・・」

削板はもちらんだが、闇で生きる2人の笑顔は暖かかった。闇で生きるものとは思えないほど、おかれた手と笑顔は暖かい。

御坂（ああ・・・この一人は救われかけてるんだ・・・静奈さんに・・・闇から・・・）

そう思い、目を細める。

涼音はあの笑顔と性格で一人を闇から出せるかも知れない。その証拠がこの手と笑顔だ。

御坂（すごい人・・・私なんか、足元にも及ばないほどすごい人・・・）

垣根「さつ、行くぜ。どうせそこらへんで缶コーヒーでも飲んでるだろうけどな」

削板「そりだらうつな」

麦野「アンタは涼音のそばにいてあげなさい」

御坂「・・分かつたわ！！」

涙をふき、いつもの気の強い顔に戻る。

御坂の表情をみた麦野は安心して微笑み、部屋を出て行った。

再び、涼音のそばに行き、手を握る。

御坂（もし犯人を見つけたら・・・レールガンぶつ飛ばしてやるー！）

うつかり手を置く。

削板「なんだー！こんなところにいたのか！探したぞ！」  
ある居続け、ふと、暗い道を見る。  
そこには、白いものが見えた。  
気になり、近寄ってみると、一方通行が居た。

垣根「…ん？」  
削板「根性で探すぞ！」

麦野「アイツならのんきに買った」コーヒー飲んでると思つたんだけ  
ど・・・」

垣根「おかしいな・・・自動販売機は全部見て回つたよな？」

部屋を出た3人は固まって一方通行を探す。  
バラバラになれば会えないかもしれないからだ。この病院は大きい。

しかし、反射はされない。

なぜか能力をきつてているようだ。

心配になり、3人は尋ねる。

麦野「どうしたのよ、いつものように」コーヒー飲んでなかつたの？」  
自動販売機の周りばかり探してたのに・・・」

一方通行「・・・」

垣根「・・・オイ、なんか言えよ

肩を叩く。

すると、一方通行は消えそうな声で何かを呟く。

一方通行「・・・H・・・れ・・・る・・・？」

削板「ん?なんだって?」

一方通行「・・・ど・・・すれ・・・まも・・・る・・・?」

麦野「何よ。ハツキリ言いなさいよ!」

肩を掴み、一方通行を壁に叩き付ける。

しかし、一方通行はうつむいたまま、またもや消えそうな声でつぶやく。

今度はなんとか聞こえた。

一方通行「・・・どオすれば・・・護れる・・・?」

垣根「はあ？ おいおい、なんのことだよ

一方通行「・・・涼音・・・大切な奴を・・・どオすれば・・・護れるン  
だ・・・?」

削板「なんだ、そんなの簡単じゃないか。お前が一緒に居ればいい  
じゃないか？」

そういうても、一方通行は顔をあげない。

一方通行「・・・自信がないんだ・・・大切な奴を・・・護れるかどオ  
か・・・!」

頭を抱え、座り込む。

いきなりのことに、3人はついていけない。

一方通行「オレは・・・！ 恐いんだ・・・！ 涼音を護れるか・・  
自信がもてねエ・・・！ どオすりやいいんだよ！！」

麦野「ちよつ・・・あんた何言つてんのよ！-！

そんなのテーマの能力使えば大丈夫だろ？が！-！」

一方通行「それでも・・・無理なんだ！！！分からねエ・・・分からねエンだよオ！！！」

アイツが傷ついて・・・！それで・・・命を狙われて・・・！  
わかんねエ・・・  
オレが護らないといけねエのに・・・！傷ついた・・・！」

大切な人が傷つけられ、重傷を負い、一方通行は混乱している。  
何をすればいいのか分からず、ついには自分に自信が持てなくなっている。

そんな一方通行に、麦野は思いつきり拳骨をする。

麦野「ふざ・・・けんなあ！！！」

一方通行「！？」

頭から煙をだし、一方通行は頭を両手で押さえ、声にならない叫ぶ  
声をあげ、床を転がる。  
後ろで削板と垣根が

「「うわ～・・痛そ～～う・・・」

などと、言っている。

しかし、麦野の耳には届いていなかつた。  
青筋を浮かべながら大声で叱る。

## 25・護る

麦野「何でそんなこと考えやがる！…テメーは第一位だろ！…学園都市の中で一番強いんだろ！…」

一方通行「…それでも無理だつて思つちまつンだよ…」

麦野「だつたら私達はどうなんだよ！…

クローンの実験の時、私たちは敵わないとかかもしれないと思ひながらテメーに挑んだ、そして勝つた！

私達でもできただんだ、テメーができるわけねえだろ？がよお…！」

一方通行の胸倉をつかむ。  
そういうわれればそうだ。

一方通行「…・・・」

削板「お～い、麦野～」

麦野「んだよ！…？」

削板「ここ病院。周りの人の視線が痛いんだ」

麦野「あ…」

言われて気づく、周りの人たちがこっちをジロジロみている。

大声で怒鳴り散らしていたからだろう。

大慌てで麦野は一方通行の腕をつかみ、外に出る。

麦野「オホホホ、失礼しました～」

病院を出た後はダッシュで路地裏に向かった。

垣根「はあ・・・恥ずかしい田にあつた・・・  
後で叱られるかもしけねえじゃねえか！」

麦野「そうなつたら私はアンタたちのせいにして逃げる」

垣根「逃げるな！！」

麦野「さあ、一方通行、どうするの？  
無様に尻尾まいてるだけか、涼音を護るか」

問い合わせても返事は帰つてこない。

まだ悩んでるらしい。

ため息をつき、頭をかく。

そして、尋ねる。

麦野「じゃあ聞くけど。アンタは涼音を護りたいの？余計に傷つく姿をみとくの？」

・・・自分は何もせずに逃げ続けるの？大切な人が傷つくのをほつといで」

一方通行「それは・・イヤだなア・・・けどよオ」

まだはつきりしない。

次第に麦野はイラつき始める。

麦野「はつきりしないよ！涼音だったらアンタみたいにウジウジ

なんかしねーで直ぐに護るつて決めるわよ！？

アンタ男でしょ！いつまでもウジウジしてねえでさつとヒッカリ  
しゃがれクソ野郎！！

垣根「どなん口が悪くなる」

麦野「メルヘンは黙りなさい」

垣根「ハイ、スマセンドした」

直ぐに謝つて後ろに下がる。

この中で怒つたら恐いのは麦野だらう。

一方通行「・・そオだよな・・・涼音はこんなことで悩まねエ・・  
それによオ、オレはテメーらよつ強いんだから、できるよな・・・  
・・・せつひひじやねエかア！…」

やつと護ると決める。

麦野は満足そうな顔でうなずく。

削板「うむーそれでこそ残忍、残酷、もやしの一方通行だ！」

一方通行「・・・喧嘩つてるんですけどア？削板くウウンン！…！  
！…？」

削板「いや、うつてないぞ。ただ本音がほろつと・・あつ

一方通行「死体決定だクソ野郎！……！」

垣根「やめる一方通行！！あつー反射復活してやがるー！」

麦野「何してんのよ、さつさと戻るわよ」

垣根「ちょっ！止めようか！？！」

一人でさつさと行こうとした麦野を止め、一方通行を止める。

4人は、病院に入った途端、冥土返しに大声出したことについて2時間ほど嫌というほど正座で説教をくらった。

## 26・絶対護る

正座をしていたために痺れた足で歩きながら、4人は涼音の病室に入る。

改めて正座の痛さを知った。

削板「根性で…我慢…！…痺れる…！」

麦野「クソ…あのクソカエル…！…いつか殺す…！」

垣根「大丈夫か涼音」

一方通行「グオオオ…」

涼音「あらあら～、ビうしたの～？」

笑顔で迎える。

御坂も一緒に見ている。

御坂「…何してたの？」

垣根「説教くらつた」

垣根「どつかの誰かさんが大声で怒鳴り散らしたからな

麦野「え？殺されたいのかしら？」

垣根「別にテーマのことだなんていつてねえだろ?  
もしかして自覚あるのか?（^\_^）」

麦野「殺す!……ブチ殺してやる……離しやがれ……！」

削板「麦野やめるんだ!いくら自分の性格が悪いからって自分のせ  
いにするのはいけない!!」

麦野「よおーーし!一人追加だ!……！」

一方通行と御坂とで麦野を必死に抑える。

垣根は今までの仕返しに思いつき馬鹿にした顔をし、  
削板はなぜ怒られたのか分からず

削板「えっ? なんでだ? オレが何かしたのか!?」

などと言い、それを聞いた麦野が

麦野「悪気がねえのがもつとむかつくんだよゴラフアー……！」

と、さらに大きな声で怒鳴り、額に青筋を浮かべる。  
すると、いきなりドアが開く。

全員で見ると、そこには怒っている冥土返しがいた。

「冥土返し」・・・ちゅうと話をじみうか? (激怒) 「

「「「「すみませんでした。もうしません」」」

涼音以外は全員速攻に謝る。

涼音は変わらず一一コ一一コとしていた。

涼音「あらあら～、どうして怒ってるのかしら～?」

などと、のんきなことも言っていた。  
強く注意をし、冥土返しが出していく。

麦野と垣根がドアに向かって、死ねゴールをしていた。  
それを無視して、一方通行は話をする。

一方通行「その・・・よお・・・さつきはオマエのせいだなんてこいつ  
まつてその・・・  
・・悪かったな・・・」

そっぽを向く。

御坂は少し睡然としていたが、すぐに笑う。

御坂「ああ、もういいわよ。あの時だから仕方ないわよ」

一方通行「・・・・・フン！」

涼音「仲直りできたわね～えら～い」

ほふつ

自分の胸に一方通行の顔を押し付ける。  
涼音を傷つけないようにとつさに反射を解く。  
直ぐに一方通行は顔を赤くして暴れる。

涼音「うふふ」

削板「トマトみたいだな」

一方通行「うるせー！－てか、トマトに例えるな！－なんか嫌だ！」

ヒツヨウゲン

ベクトルを操作し、やつと離れる。

そして、少し顔を赤くしたまま言つ。

一方通行「お前はオレが絶対護る……絶対だ……  
だから安心しろ……」

涼音「・・・

珍しく目を開き、驚いていたが、すぐに閉じ、微笑む。

涼音「そり・・・ありがと・・・一方通行・・・

名前を呼ぶ時、声が小さくなる。  
涼音はこの名前を呼ぶのを嫌う。

本当の名前ではないのに呼ばれる一方通行が可哀そうだとおもって  
いるからだろう。

それに気づいた一方通行は名前を考え、伝える。

一方通行「そうだなア・・・今度からオレの名前は鈴科すずしなでいいぜ!・・・

涼音「鈴・・・科・・・?」

一方通行「あア、そオすればイイだろ? オレの名前つてことで、な  
?」

涼音「鈴科・・・フフ・・・分かつたわ」

笑顔になる。

皆はその笑顔をみて安心し、その日は一方通行以外は帰つて行つた。

夜、一方通行は涼音の部屋で見張りをしていた。  
また襲われないようだ。  
ぐつすり眠っている涼音を見るたび安心するが、それでも気を抜かない。

一方通行（今も涼音を狙ってるかもしけねエ・・・オレが護らうねエ  
となア・・・）

その時、物音がした。  
警戒して立ち上がる。

耳を澄ますが、何も聞こえない。

しかし、さっきの音は絶対に気のせいではない。

一方通行（きやがったか・・・？来るならここよ。ズタズタに引き裂いてやる）

少しずつドアに近づいていく。  
そして、一気に開ける。

一方通行「・・・」

しかし、だれもいない。

警戒しながらドアを閉め、涼音のそばに行こうと振り返る。しかし、涼音の方をみて目を見開く。

なぜなら、涼音に向かつて包丁を振り上げている女性がいたからだ。考えるより先に体が動き、女性に向かつて右手を出す。

しかし、女性に触れることができなかつた。

一方通行「チツ……能力者か！？」「

直ぐに涼音に触れてみる。

ちゃんと触れたので涼音はさりわれていなければなりないよつだ。すると、涼音が起きる。

涼音「鈴科……？」

一方通行「涼音……お前は寝とけーまだ回復してね」

「……」

涼音「？」

言葉は続かなかつた。

なぜなら、なぜか頭を誰かに殴られたからだ。

涼音「……？」

声を上げることなく床に落ちる。

衝撃で傷が開いたらしく、包帯に血がにじむ。

一方通行「涼音！大丈夫か！」

涼音「ツツ・・大丈夫・・よ・・それより・・」

目の前にいる目を部分を隠した女性を見る。  
女性は口に笑みを浮かべ、刃物を持っている。

「・・・」

何も言わず、刃物を振り上げる。

一方通行「気を付けるよ。こいつは光系の能力者みたいだぜエ・・」

涼音「ええ・・・」

二人は身構える。

女性は刃物を振り下ろす。  
出来るだけ大きく回避する。

おやらく光をまげて自分の手の位置を変えていたからだ。

涼音「どうする？ 能力使えないし・・・」

一方通行「・・・」

能力を使えば病院が壊れてしまつ。

それはダメだ。

そのためただ逃げることしかできない。

一方通行に攻撃をすれば手を曲げたりできるのだが、おやらく涼音  
しか攻撃しないだろう。

そう思い、ただ女性の攻撃を避けることしかできない。

その時、いきなりドアが開き、レーザーが女性めがけて襲い掛かる。  
女性はとっさに逃げ、窓から逃げる。

二人はドアの方を見る。

すると、そこには麦野がいた。

麦野「あら、逃がしちゃった？ ちょっとしかかすらなかつたみたい  
ね」

窓の近くには血が落ちていた。

## 28・アイテム+一方通行（前書き）

お気に入り50超え・・・だと・・・！？

素人が書いた小説をこんなにたくさんの人々に呼んでくれているなんて・・・！

とても嬉しいです、ありがとうございます！！

これからも面白い話を頑張って考えていきます！

## 28・アイテム+一方通行

一方通行「ありがとなー、麦野ー」（棒読み）

麦野「棒読みやめる。ちゃんと感謝しなさいよ。  
気になつたからアイテムの全員で見に行つたらアンタたちが戦つて  
たから助けてあげたのに。  
とつ、言つわけでおごれ」

一方通行「別にいいけどよオ」

一方通行とアイテムのメンバーは近くのファミレスに来ていた。  
今は、垣根と削板が涼音を護つている。  
交代だ。

フレンダ「アナタって本当に真っ白だね。羨ましい」

本当に羨ましそうな目である。

紫外線も反射している一方通行の肌は焼けていないため、真っ白だ。

一方通行「肌が白くても別になんもいいことねえぞ」

絹旗「女子は肌が白い方がいいんです。だから私も毎日日焼け止め  
塗りますよ。」

一方通行「そういうやア、ずいぶン前の番組で日の光が強い日じゃな  
いときに強い日焼け止めはあンまりよくねエつていつてたなア」

絹旗「マジですか！？！」

一方通行「知らねエよ。興味ねえ」

日焼け止めの話で盛り上がり始める。

滝壺は一人ボ～としていた。

麦野「まつ、といあえず。涼音が命を狙われている」とはこれで確定したわね。

後はあの女をどうするかよ。光系の能力者つてめんどくさいのよね

「

ズズズと、ジュースを飲む。

本当に光系の能力はめんどうなのだ。

光をまげて自分の手が曲がっているように見せてくるからだ。

攻撃した場所に虚像を作り、全然違う方向から攻撃してきたりする。

一方通行「ぶつ壊してもいい建物の中に入れば建物ごと壊して殺せ  
るンだけどなア・・・  
ンなことしてくれるわけねエな」

麦野「うへん・・・周りになんにも無いところに誘い込むんで当

たりがまわす攻撃するか、相手の体の一部を捕まえて攻撃するか・・・

・

フレンダ「その涼音とか言う人を囮に使えばいいんじゃないの？」

一方通行「・・・そオするしかねエか・・・」

これは一番使いたくなかった作戦だが仕方がない。

遊びに出かけるふりをして誰も居ないところに誘いこむしかない。

麦野「まつ、ここからも手伝わせるから安心して。特に滝壺がいるから、ね」

滝壺「・・・任せて」

無表情で親指を立てる。

しかし、正直見た感じ、頼りになるとは思えない。

一方通行（この女、ホントに使えるのかア？）

フレンダ「結局、麦野に巻き込まれたって訳よ」

麦野「いいじゃない」

普通の女子らしくしゃべりだす。

心の中で「こつからなんがうつしてねばむたの」とか思つたのは秘密だ。

## 28・アイテム+一方通行（後書き）

いや、日が強くないときに、強い日焼け止め（50+とか）はあまりよくないってずいぶん前に聞いたことがあるんですよ。

・・・ずいぶん前だから本当かどうかは覚えてません。

涼音「久しぶりの外は気持ちいいわね～」

やつと退院できた涼音は空気を吸う。

一週間、ベットの上に畳たので退屈だったのだ。

垣根「よかつたな。あの女も襲つてこなかつたし」

削板「そうだな！」

いつものメンバー+アイテムは喋りながら街を歩く。  
今日こそ、あの女を捕まえるつもりだ。  
事前に涼音にも話をしている。

涼音「クレープ美味しいわね～」

麦野「二つの間に買ったのよ」

涼音「やつや」

麦野「気づかなかつた・・・」

でもこる学生のように笑こあつ。

垣根もいつの間にかクレープを買い、涼音と食べ比べをじみつと持  
ちかける。

垣根「ほり

涼音「あらあら～、ありがとい～

あと少しで口をつけたとき、一方通行が大声を上げる。

一方通行「待てええええエエエエエエエエエエエエエエ

なぜか必死に止める。

垣根は舌打ちをする。

垣根「なんで止めるんだよもやし

一方通行「あア？誰に言つてんだクソメルヘン。  
つーか、テメー、今何しようとしたやがった？」

垣根「え～？何のことかな～？全然分かりませ～～ん

しらをかる。

次第に一方通行の額に青筋が浮かび始め  
しかし、垣根は知らぬ顔でそっぽを向く。

垣根「いいじゃねえか。別に間接キスくらい」

一方通行「殺す！…！ぶつ殺す！…！」

垣根「別に涼音はテーマの彼女じゃねえだろ？が…！」

喧嘩を始める一人。

麦野は涼音に話が聞こえない様に涼音の耳をふさぎ、10メートル離れたところに連れて行っている。

涼音は気にせずに美味しそうにクレープを食べ続けている。

削板とアイテムのメンバーは楽しそうにその光景を見て、笑う。

しかし、楽しそうにしている彼らをある女性がひっそりと見ていた。

「憎い・・憎いの・・・・・あの「化け物」が・・・・・！  
絶対に殺す・・・・・！」

親指の爪を噛みながら悔しそうに顔をいがませる。  
そして、武器をたくさん持つ、後をつけ始める。

垣根（・・・来たか・・・）

隣にいる麦野を見る。

麦野と田があい、お互いうつなづく。  
麦野も気が付いたらしい。

垣根「一方通行・・・」

一方通行「あア・・・分かつてるぜH」

削板「おーーちょっと暗ことこうひつてもみないかーーこうー。」

変わらない笑顔で先頭を歩き、路地裏に行く。  
これは彼の役目だ。  
皆もいく普通に後をつけっていく。  
すると、思った通り、気配はついてくる。

-----

暫く歩き、大分奥まで来た。

「こならビルを崩してもあまり聞こえないだろう。ビルの中に入り、演技を続ける。

涼音「かなり古いわね～・・・カビてるのかしら～？」

フレンダ「イヤ、ただ汚れてるだけだと思つるけど・・・」

絹旗「あれ見たください。超汚いですよ」

滝壺「どれ？」

絹旗「ほら、これですよ」

指を指し、近づいていく。

ほかのみんなは「ぐく普通にしている。  
しかし、次の瞬間。

ビルに一気に亀裂が入った。

一方通行「！？！」

垣根「みんな逃げ・・・！」

言葉は続かなかつた。

なぜなら、一気に崩れてきたからだ。

叫び声をあげることもできないまま、がれきに埋まつた。

「やつた・・・！やつたわ！！ついにやつたのよ！！  
アハハハハ！！！」これで私たちを邪魔するやつはない！！！  
ねえ！！一方通行くん！！」

笑顔で愛おしい人を見る。

愛おしい人は、ただ茫然と立つていた。

一方通行「す・・・涼音・・・」

能力のおかげで無傷の一方通行は涼音のいるはずのがれきを見る。  
が、すぐに瓦礫を取り除き始める。

女は笑いながらその姿を見る。

「やつたやつた！！！邪魔者は死んだわ！これで私たちの恋を邪魔  
するやつはいない！

一方通行くんも喜んでよー！」

一方通行「涼音！！！麦野！クソメルヘン！！！削板ア！！！」  
・・・・なンで返事しねエんだよオ・・・・！！！」

いかりで拳を床に叩き付ける。

能力のため、一方通行の拳を中心に、半径の5メートルくらいが大破する。

「ねえ、なんで喜ばないの？」

死んだ人たちが何しようとしてたのかは知ってるよ  
わざついてきて、逆にやったのよ。

一方通行くんも望んでたことでしょ？」

本当に分からぬいらしく、少し顔をいがめた。  
その顔を見ると、怒りがわいてきた。

目の前の女はみんなを殺した

# 友達を殺した

## ライバルを殺した

オレの・・・好きな奴を殺した・・・！！！

能力を使い、瓦礫を投げ飛ばす。

すると、確かに当たる場所に投げたはずなのに、瓦礫が曲がった。どうやら光を曲げてこないしこ。

その時 思い一した

一方通行でもオレにこんなに壊れちまつてるからなア……

「！？！」

次の瞬間、次々と高速で瓦礫が向かってきた。  
何とかよけるが、少しかすつてしまつた。血が流れてきたが、気に  
しない。

「・・・なんで・・・?なんで」んなことあるのー?

一方通行「それはこっちのセリフだア！－！」の・・クソ女がアア  
アアアアアアアアア－－！」

「待て！！一方通行！！！」

ピタッと、音が聞こえてきた。そのまままどに止まる。  
見ると、そこには埃や土はついて、少し傷を負つてこなが無事の仲

間がいた。

麦野「たくつ、私たちをなんだと思つてゐるの？レベル5よ？あれくらい、防げるわよ。」

・・・さて・・・ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・いの女かしら？」

削板「根性だ！！！」

一方通行「お前ら・・涼音は！？涼音ビビりしたンだ！？」

涼音「私はこゝよ～」

一方通行「大丈夫か！？怪我してないか！？頭とか大丈夫か！？？」

涼音「大丈夫よ～？」

ペタペタと怪我がないか触りまくる。

もし、人通りの多いところでそんなことをしていたら、通報されてしまう。

その光景をみていた女は、涼音を睨む。

「そう・・まだ私の方を向いてくれないのね・・・  
だったら・・・その女を肉片も残さずに殺して、私を見てもらひ  
わ！！！」

涼音に向けて、ナイフを投げる。  
しかし、ナイフは誰かの手によってふさがれた。

絹旗「超危ないですな・・・」

そういう、ナイフを持つ。  
能力を使つたため、無傷だ。

悔しそうに唇をかみ、田つきを鋭くする。

「何でみんな邪魔をするの・・・？」

その女が私達の邪魔をしてるから邪魔される前に殺そつとしてるだけなのに・・・ね！――！」

先に、円形の刃物が付いた紐みたいなものを振り回し始める。  
皆はすぐに真剣になる。

31・アイツが「化け物」ならオレも「化け物」 オレが「人間」ならアイツも

「おひあつー」

紐でつながれている円形の回転している刃物を飛ばしていく。皆は大きくよける。

「ほりほりーちゃんとよけないと当たつねやつよーーー。」

先ほどの普通の顔は消え去り、顔をいがませ、口が裂けるほどの笑みを浮かべていた。

完全に、「闇」の世界に生きる者の顔だ。

性格も少し変わっている。

麦野「調子に乗ってんじゃ……ねえよ……！」

少しキレ気味の麦野がメルトダウナーを放つ。腹に直撃し、女の体は二つに分かれ、血が噴き出す。しかし、女は笑っていた。

麦野（ちいつ・レベル4くらいの能力者か！？）

「あつは、どこみてんの？私はここだ……よ……。」

麦野「チツー！」

いきなり後ろから現れ、銃からレーザーを撃つ。

何とか体をまげてよけるが、腹を思いつきり蹴られる。

しかし、麦野は笑う。

まるで、勝ったかのように。

その笑みに女は気付き、後ろを見る、すると、そこには垣根がいた。足元も見ると、いつの間にかフレンダが白い線を引いていた。

垣根は口を吊り上げ、女に向かつて羽根を伸ばす。

フレンダは、にやりと笑つて線に火をつける。

次の瞬間、大爆発が起こった。

皆は黙つて、煙と埃が消えるのを待つ。

麦野なら、能力を使って無傷だが、女は跡形もなく消し飛んでいるだろう。

誰もがそう思つていた。

笑い声が聞こえるまでは。

「つたく、危ないわね」

一方通行「！－何で生きてやがるンだ！」

平然と上半身を表す。

涼音は、麦野が居ないことに気付く。

涼音「・・・麦野をどうしたの・・・」

「麦野あ？あつ、もしかしてこれのこと？」

そういう、左手を上にあげる。

アイテムと、涼音は声を上げる。

なぜなら、女が持っていたのはボロボロの麦野だったからだ。体中血まみれの麦野は少しも動かない。

直ぐに一方通行がベクトルを操作し、女に近づく。

女は予想していたらしく、麦野を離し、軽くよける。落ちた麦野を、慌てて女子たちが拾い、涼音が能力を使って治し始める。

絹旗「麦野！－麦野！」

滝壺「麦野、死んじやうの・・・？」

フレンターナー！黒鹿な」と言わなして！妻野は死ななしゃ！！

涼音・早矢治わないと……！」

肖林 漢音 任せなぞ！」

真剣な目つきでうなづく。

少し潤んでしたか、何も言わずに肖板は前を向く

女に向かって衝撃波みたいなものが飛んでくる。  
しかし、女は逃げようともせず、笑いながらそれをみる。  
なぜ逃げない？そう思つたが、すぐに消えた。  
なぜなら、女が消えたからだ。

涼音「・・・軍霸！後ろ！！」

削板「えつ？」

言われて後ろを振り向くと、あの刃物を振り上げた女がいた。そして、手を振り下ろす。

次の瞬間、削板は血を流し、倒れた。

涼音は顔を青くして、削板見る。

どう見ても致命傷の傷だ。

今すぐ治さないといけない。

しかし、

涼音（沈利も危ない・・・！）「誰かお願ひ！軍霸をこっちに運んで！！！」

垣根「分かった」

垣根が動く。

女はずっと一方通行を見ている。

「驚いた？けつこう便利な能力でしょ？」

一方通行「・・・テメーのはめんどくせ工能力だな」

「あつ、駄目よ。名前で呼んで。私の名前は橘樹 悠。  
ちゃんと覚えてね。 一方通行くんだけね」

垣根「ガハツ！！！」

削板に近寄るうとしていた垣根の背中が斬れ、血があふれ出る。  
目を向けると、垣根だけでなく、アイテムも次々に血を流し、倒れていく。

最終的に残ったのは一方通行と涼音だけだ。

返り血を浴びた橘樹は笑顔で仲間の死でショックを受けて動けない涼音に近づいていく。

一方通行「やめろーーーぐうつーーー！」

突如、嫌な音がし始めた。  
それでも、涼音を助けようとすると、体が動かない。  
そして、能力も使えない。

驚いているとき、橘樹が涼音の腹をけつた。

涼音「グツ」

橘樹「ほらほら、痛い！？痛いかしらー？」この「化け物」が！――

一方通行「やめろオーーー！」

その声で蹴るのをやめた橘樹は冷ややかな目で一方通行を見る。

橋樹「なんで? だって、この「化け物」が私たちの邪魔をするんだよ! ?

「この女は一化け物なんだよ！？」「

一方通行「違う！！！」

大声で怒鳴る。

橋樹がおひえたように一步下がった。動かない体を無理やり動かし、一方通

**動かない体を無理やり動かし、一方通行は立ち上がる**

一方通行「涼音はなア・・・！」「化け物」なんかじやねエ！！！  
もしそうなら・・・涼音が「化け物」ならオレも「化け物」だア・・・

オレが「人間」なら涼音も「人間」だ!!

涼音はオレの命を救った恩人だしなア……オレは涼音が好きなん

暫くの間、橘樹は茫然としていたが、すぐにもとの顔に戻る。そして話始めた。

橘樹「だったらその女を殺せば一方通行くんは私のことを見てくれ

るんだね？

私、天才だから。能力を使えない様に準備もしてんだよ　そこに機械があるでしょ？あれだよ。

まつ、今からじゃ間に合わないけどね。  
「じゃつ・・・バイバイ」

刃物を振り上げる。

涼音は目をつぶるが、諦めずに演算をしようとした必死に頭を使う。  
一方通行の叫び声が響く。  
しかし、次の瞬間、炎が橘樹を包んだ。

紅の炎が橘樹を包み込む。

橘樹「なっ！なんで！？能力は使えないはずなのに……熱い……熱い……！」

あまりの熱さにのたうちまわる。

涼音と一方通行は茫然としながら、機械が置いてある方をみる。すると、そこには血を流した削板が機械を壊していた。

削板「へつ・・・へへ・・・！役に立つたたろ・・・？」

血の氣のない顔で笑う。

すると、気絶していた麦野が意識を取り戻し、のた打ち回っている女に手を向け。

麦野「よくも・・・私の親友を・・・蹴ったな」の・・下衆野郎！

「！」

橘樹「！？」

自分に向かってくるメルトダウナーを見て、橘樹は驚く。が、すぐに叫びだす。

橋樹「なんで！？なんでみてくれないの！？  
私は一方通行くんのことが大好きなのに！？  
何でよ・・何でなのよ――――――！」

橋樹はメルトダウナーに包み込まれ、跡形もなく消えて行った。  
暫くの間、皆は黙っていたが、お互い顔を見合わせ、地面に転がる。

垣根「おっ・・終わつた～～・・・・・」

麦野「死にそ～涼音治して～」

涼音「いいわよ～」

みるみるうちに治つていいく。

その時、削板が一方通行の言葉を思い出し、言つ。

削板「そりこえんば、一方通行は涼音のことが好きだったのか？」

フレンダ「やつを思いつきりこつてたじやん

絹旗「超意外な告白の仕方ですね」

すると、話を聞いていた、涼音が一方通行に近寄り、言つ。

涼音「私も好きよ」

一方通行「！！？」

垣根「クソ！！面白くねえ！！」

海にさわる。歯を磨く。

しかし、次の二言は誰も予想できなかつた。

涼音「これからも幼馴染としてよろしくね~」

一氣にみんながこける。

一方通行はうつぶせになり、何やらブツブツつぶやいていた。涼音だけは訳が分からず、首をかしげていた。

### 32・恋のライバル出現

一方通行「もオ……どにかしてくれ……」

垣根「オレにも何もできねえ。ラーメンつめえ

学校の食堂でラーメンを食べ、泣きそうな顔で言つ。  
垣根は横で厭きた顔で同じくラーメンを食べる。  
涼音にさりげなく告白みたいなものをしたのだが、鈍感なのか、氣  
づいてもらえたかったからだ。

それからしばらくしても一方通行はウジウジ落ち込んでいる。  
麦野が何回もキレてもだ。

そんな状態のまま、夏休みが終わってしまった。

涼音「あらあら～、なんで鈴科は落ち込んでるのかしら～？」  
麦野「アンタねえ……」

涼音「？」

ため息をつかれ、涼音は首をかしげる。

本当に分かつていないらしい。

削板も、一方通行にもう根性根性と言わなくなるほどだ。

それほど落ち込んでしまっている。

そんな時、黒髪の一人の男が涼音に近づいてきた。

—

一直線に「ぐちに向かってくる男を見て、麦野は警戒する。

麦野「何？あの男。知り合い？」

涼音「えーと・・・知り合いじゃないわね~」

そのまま近づいてき、涼音の前で馬は止まる。

そんなこと気にせず、男は涼音に花束を渡し、言ひ。

「涼音さん！――オレと付き合つてくれ――――――！」

— 1 —

食堂の全員が黙る。

暫くして、「告白?」「え?」など「んなりで~」「ムードねえな~」とか、小声で言い始める。涼音は珍しく目を開けて驚いている。いきなり言われれば誰でも驚くが。

イケメンに入る男は、気にせずしゃべりだす。

「オレは一目見たときから涼音さんが好きやつてん！－それで夏休みが終わったら告白しようと決めてた！」

涼音さん……オレと付き合つせ——オートツ……手も足も何もかも滑つた————「…………」「…………」

明らかにわざと、一方通行と垣根が熱々のラーメンを男に向かつて投げる。

熱々のラーメンのスープと麺を頭からかぶつた男はあまりの熱さに大声を上げる。

大声を上げている男の腕を一人でつかむと、垣根と一方通行は走り出し、食堂を出る。

全員ポカンとその姿をみている。

屋上に来た3人は、すぐに騒ぎ始める。まず、男を壁に叩き付け、二人が怒り始める。

「アイタ！！」

一方通行「テメー、どうこいつもりだこの二ドア-----！」

垣根「ぶつ殺すぞ、ゴラアツ！...！」

「何やねん！－オレの邪魔すんな！...！」

ラーメンの麺を頭に乗せたまま、怒る。

そんなところに、追いかけてきた3人が追いついた。涼音の姿を見た途端、男は涼音の手を取り、顔を近づける。

「涼音さん……オレと付き合つてくれ……オレは本気や……」

涼音「……ラーメン臭い……」

「……？」

涼音がボソッとつぶやく。

男はショックを受けたが、すぐに立ち直る。

「やうか……涼音さんはシンテレなんか……でもシンテレでもオレは涼音さんを愛せる……！」

いきなり、男が頭を押さえ、床を転がり始める。そんな男を、誰かが足で踏みつけた。

踏みついている人を見ると、知らない女子がいた。

「たぐつ……テメーは何してんだこのカス。髪の毛全部抜くぞゴラア」

「うう、男の髪の毛を掴み、本当に抜くとする。男は痛いのだらう、謝りはじめる。

「うてててて……マジゴメンナサイ！……だから髪の毛抜かんとして  
————！」

「次やつたらじばきたおすぞ」

そういう、手を離す。

だが、2、3本抜けたらしく、手を振っている。

そして、涼音に謝る。

「ホンマ『ごめん。』のアホ、カスやから許したって。な？」

そういうながら、男を蹴り続ける。

皆は苦笑いするしかない。

「うちの名前は大川 薫や。このゴミカスが迷惑かけて『ごめんな』。  
ほら、西川もさつさと謝らんかい。土下座して」

西川「なんでお前はそつやつて直ぐにオレに土下座させよ!つとすん  
ねん！！」

イジメか！！」

大川「うちいやからー、人を虐めるのが楽しいねん。特に、アホな  
お前を虐めるときがなあ・・・」

西川「・・・・」

悪魔の笑みで西川を見る。すると、西川はもつダッシュで逃げた。  
追いかけもせず、大川は涼音と話す。

大川「アイツ、惚れたら一直線やと思つから、これからもストーカーみたいに付きまとうと思つねん。

もし迷惑なことしたらうちはいつてな。しばいたるから

涼音「えっ・・ええ・・・ありがとう・・・?」

はにかみながら礼を言つ。

言うことがいちいち毒舌だし、本当にやりそだだからだ。

そのまま、大川は西川を追いかけてどつかに行ってしまった。

残されたレベル5たちは呆然としていたが、垣根と一方通行はギラ

ついた目で西川がさつた方向をみていた。

### 33・川川コンビ

大川「今すぐ土下座して謝つてここのカス野郎」

西川「いでででででつ……髪……髪が……剥げる……！」

大川「剥げるゴミカス」

床に西川を寝転がせ、その上に伸し掛かり、髪の毛を引っ張りながら、毒舌で話をする。

友達として先ほどのことが許せないからだ。

大川「本当に恥ずかしい、何しやがってんだよテメーはよお。血まみれにしてゴミ箱に捨てるぞカス」

西川「それはやめて…………てかっ！オレは悪くないわ……オレはただ気持ちをすぐにでも伝えたくて……！」

大川「伝えたくてなんでこうなるのかなー？おんどうりやこのドアホガ……！」

西川「いででででつ……腰……腰が折れる……！」

あまりの痛さに涙目になる。

やっと手を離したころには、口から魂が抜け賭けだった。

田舎で育つた大川は、小さい時から重いものを運んだり、畠を駆けまわつたりしていたので、普通の女子より力が強く、足が速い。能力を使わなくても痛い目に合つ。

大川「……で？ なんで好きになつたんや？」

怒るのをやめた大川は、尋ねる。

その瞬間、西川はいきなり起き上がり、話しだした。

西川「……オレは涼音さんが転入してきたときから一田ぼれやつてん！」

もー！メロメロやで！あの美しさと可愛さを兼ね備えた笑顔を見たらオレはもうその日一日幸せや……！」

大川「うぜえ」

西川「まだその時は告白できひんかったけど、夏休み中に猛練習してから今田してん！」

大川「うん、何の猛練習？」

西川「えつ？ 告白の」

大川「へ～・・でつ？ 宿題は？」

西川「そんなの後や……一番に涼音さん……」

そういう終わった時、大川が西川の類を持ち、思いつきり引っ張り始めた。

西川「いひやいいひやい！――！」

大川「んなことじとる暇があるんやつたら宿題せえ宿題を――！  
その腐つた根性づちが血反吐吐かせてでも叩き直したろかボケエ！  
――！」

委員長の大川には許せなかつた。

彼女は口が悪いが、嘘はつかず、また、誰にでも同じよう丁接する  
のでみんなからは信頼されている。

そんな彼女に、多くの男子が告白するのだが、大川は恋愛に興味ない  
ので、今まで一回も付き合つたことがない。  
いつも西川と一緒にいるため、男子にちやかされたりするのだが、  
すぐに鉄拳で黙らせる。

そんな西川も、裏表が無い性格と、面白ことをしてよくみんなを  
笑わせるので、信頼されてくる。

大川と同じく、告白されたことは何回もあるのだが、自分が本当に  
好きになつた相手ではないと付き合わないと決めているらしい、一  
回も付き合つたことはない。

西川「んなこといわれてもなあ・・・初めての――まあやしなあ・・・

・」

大川「ただの一田ぼれでそんなことができるお前にマジ引くわ。  
近寄らんといて、空気が腐るからついでに息もせんといて」

西川「オレに死ねと！？！」

「は～い、そこの漫才やめる。授業するぞ」

大川「漫才とかやりますよ、コイツがアホやから仕方なく付き合つ  
てるだけですよ」

「そ～か、まあ、西川はアホだから仕方がないな」

西川「え～～～！？なんやそれ！？おかしくないか！？！」

「は～い西川、廊下立つてや～」

西川「なんでやねん！？！おかしいやないか！！大川も同罪や！  
！」

そういう、大川を見ると、席につき、馬鹿にした田でひからみて  
いた。

大川「人のせいにしないでもらえませんか～？」西川～

西川「殺す！？」

大川「逆に殺す」

西川「『い』めんなさい」

クラス全員が笑う。

こんなのは日常だが、やはり笑つてしまつ。

すると、西川が大声で言い始めた。

西川「見とけよ……絶対に涼音さんと付き合つねんからな……」

大川「そりや、永遠に無理なことやな。考へんでも分かるやろ。  
それとも、考へても分からぬアホなんか？」

西川が暴れだすが、最終的には、廊下につまみ出され、廊下でシクシク泣きながら体育座りをしていた。

### 34・カスはカス

授業が始まつても、レベル5たちは茫然としたままだつた。涼音を除いて。

涼音だけはいつものようにニコニコしたままだつた。  
今の状況をあまり分かつていないのでかもしれない。  
そのまま、放課後になり、帰ることになった。

垣根「・・・なあ、あの男殺していいか?」

一方通行「あつ、だつたらオレもやりて」

麦野「どうでもいいわよ

「ここで誰も止めないのはいつものことだ。」

涼音「ねえねえ~、帰りにクレープ食べてこきましょ~」

削板「腹減つたからちよしつづこな!」

そういう、校門に近づく。

その時、麦野は見た。

門の周りでウロウロしている変態を。

純粹な涼音が汚されないことに、無理やり方向を変える。  
訳が分からぬまま、涼音は素直に従つて曲がる。

しかし、いきなり曲がつたのがダメだったのか、見つかり、すごい勢いで走ってきた。

西川「涼音さあ～～～～ん？」

涼音を抱え、逃げる。

最初は茫然としていた男子たちが、慌てて後を追いかめたり、麦野もそれなりに足は速いのだが、西川はそれ以上の速さで追いかけてくる。

西川「待て――――――――――！」

垣根「アイツ結構速くね！？」

一方通行 - ソンアリ? 黒鹿がじやねエのオ?』

垣根をあこぎテアリヘケト川でス川しやかうて……！」

削板——どうだぞ！ こんなのが根性でかんはれ！」

壇根にしがれ、それできるのお前だけ」「

削板  
「え？」

涼音「あらあら～追いかけっこかしら～？」

麦野に抱きかかえられたままのんびりいつ。

その時、一方通行は気づいた。

抱き方がお姫様だつこだといつこと。

一方通行（アレー？このクソ女何してやがつてンだア？オレより先に涼音をお姫様だつこ？生殺しにするぞゴリラッ！――！――！）

麦野（なんかす）に殺氣が・・・！）

普通の人なら震え上がる殺氣を当てられながら、逃げる。

気が付けば、あと一メートルで追いつかれる。

このままでは駄目だ！そう思つた時。

西川が吹っ飛んだ。

全員「「「「」・・・せつ？」」「」」

呆然とする。

そのまま西川は吹っ飛び、顔面から落ちる。

最初は何が起こったのか分からなかつたが、大川がいつのをみて分かつた。

とび蹴りをしたらしい。

額から血がどくどく流れながら、西川は怒る。

西川「いつてえ・・・何すんねんこの馬鹿！－！  
いちいち邪魔すんなや！－！」

その言葉を聞いた大川に青筋が浮かぶ。  
そして、怒鳴り始める。

大川「何やとこのカス！－！テメーさつきうちが言ったこと分かつ  
てんのかよお！－？？

何また迷惑かけよるんじや！－！

このカスカスカスカスカスカスカスカスカスカス  
！－！－！－！」

西川「ぐおおお・・・言葉の刃が・・・！－！」

大川「テメーはバカか！－？こんな簡単なことも考えても考へても  
分からん馬鹿なんか！－？

おんどればどんなけ脳みそないんじや、中身空っぽすぎてもう音も  
ならんか！？ええ！－？

もう空氣の無駄やから息止めて、ついでに心臓も止めて地獄行つて。  
お前みたいなクソボケカスにはピッタリやな？だつてカスやからな

?カスにはそこがお似合いやな。ホンマにこいつてこんかいこの、下衆が」

西川「毒舌・・・！」

心を傷つけられた西川はシクシク泣き出す。

鬼の形相から一変し、いつものクールな表情で大川はレベル5たちと話しあう。

大川「ごめんなー、注意したばつかやねんけどこいつアホやん? やから何回行つても分からへんねん。

カスやから見逃したつてな。

後、またこんな変なことしだしたら問答無用で殴つていいで?  
もしうざかつたら目玉抉り出して髪の毛全部抜いて血まみれにして  
もいいで」

クールな顔で恐ろしいこと言い出す。

皆は苦笑いするしかない。

話し終わると、大川は西川を片手で引きずり、帰つて行つた。

皆は、またもや茫然としたが、気を取り直し、クレープ屋に向かつた。

### 35・食べかけ（前書き）

お気に入りが70超え・・・  
こんな駄作を呼んでくださいありがとハジセコモターーーー！

### 35・食べかけ

それぞれ、買ったクレープを食べながら、ベンチに座る。焼きたてのクレープの生地もモチモチとして美味しいが、中身はもつと美味しい。

麦野「おいし～ 久しぶりに食べたわ。やつぱり、久しぶりだともつと美味しく感じるわね」

一方通行「・・甘エ・・」

涼音「美味しいわね～、あつ、それ一口ちゅうだ～い

垣根「いいぜ、ほら」

涼音「ありがと～」

そういう、垣根の食べかけのクレープを一口がじる。頬にクリームをつけ、本当に美味しいそうに食べる。すると、垣根が

垣根「ホホにクリームついてるぜ」

一步通行「！～？」

そういう、舌でなめどる。

見ていた周りの人たちは「熱いね」、「恋人か?」などと言う。

すると、一方通行は怒る。

鬼も悪魔も逃げ出しそうな顔で垣根の首を絞め始めた。

垣根「ぐえつ！-!がつ・・はつ・・・-!」

一方通行「テメー・・・

「… 壇根」へつ・・氣づいてない・・のかよ・・涼音のしたことを・・

一方通行 「・・・・」

必死に思い出す。

涼音が欲しいと言つて、クソメルヘンの食べかけを一口・・・ン

つ？食べかけ？

思い出し、垣根をほり投げた。

しかし、垣根は能力を使い、羽根を出したため、怪我をしなかつた。聞こえるように舌打ちを連続でする。

すると、心が傷ついたのか、垣根は涙を流しはじめる。

垣根、ちよつ……心が傷つけられる……やめてくれ……

垣根「連續でやるな――――――! 最後なんかもうお前の呪いつなつてんだよ――。」

一方通行「オレは舌打ちが得意でなア 最速で一秒で5回できンだよ」

垣根「断なんああああああああああああああーーー！」

翻訳者ノ。

すると、麦野がキレた。

「…………！」

凄い剣幕で追いかけ始めた。

当然一人は逃げる

たとえ、一人が麦野よりも強くても、今の麦野と戦う」となんてでき  
ない。

戦おうとすれば、足かすくみ、動けなくなつてしまひほのまのと削板と涼音はクレープを食べ続ける。

削板「うまいな」

涼音「本当ね～」

ほほえましい光景と、地獄のような光景があつた。

そして、そんなほほえましい光景に近づく一つの不審な影があつた。不審な影は、涼音に一目ぼれした西川だ。

のだろう。

しかし、そんな彼の行動を不信に思つた周りの人たちに風紀委員を呼ばれ、どこかに連れて行かれてしまつた。

西川は気が付いていた垣根と一方通行は通報した人は心中から「Nice!!!!」と感謝していた。しかし、次の瞬間、二人の近くを「原子崩し」が通った、

35・食べかけ（後書き）

作者「今日は記念すべき日、お気に入りが70を超えた日。ついでケーキ食おうぜ。うちは金払わんけど」

垣根「払えよ

作者「馬鹿野郎。そんな」と言つてたら一方通行に涼音をあげりや

垣根「買つてきます！！」

大川「すみませんでした。本当にスミマセン。このカスは骨の髄まで常識を叩き込ませます」

黒子「いえ、そこまでなさらなくともよいじこのですよ?ですが、その気持ちはよく分かりますわ!」

西川「やろーー?好きな人があると体が勝手動いてまうねんな!」

黒子「ええ! まつたくそりですわーーおそれくその涼音さんとやはツンデレですわーー!」

西川「ツンデレ! ? マジかい! ? ジャあ、オレのことすきやねんな! !?」

大川「失礼しました~」

まだ会話を続ける西川を引きずり、大川は風紀委員の本部を出て行つた。

大川(ここにも同種があつたんかい・・・もつ一度と来させんとかなアカンのう・・・)

西川「いや~あの人とは話が合つわ~。なつ、大川もそつおもわへん! ?」

大川「じゃかあしいわ！！！」

西川の顔面に蹴りが入った。

一人は、近くのファミレスで晩御飯を食べていた。

大川「まつたく・・・アンタにはあきれるわ。その根性はどうからくるんだ？」

西川「もしかん・・・愛に決まつてゐやう・・・」

そうこうと、大川は思いつきり顔を歪める。

大川「・・・寒つ本当にやんなことこいつやつ折るんやのハ・・・吐き氣があるほど気持ち悪い」

西川「毒を吐くな――」

大川「毒吐きまくったるわ。お前みたいなチビに何ができるんや? 涼音さん背が高いで。  
もう少しで一八〇ぐらいあるんやないか?  
それにくらべてお前は・・・一七〇あんのか?」

皿を締めて馬鹿にするように西川を見下す。

当然、西川は怒る。

西川「ギリギリあるわ! 一七〇・二や! 」

大川「ほー、靴下で伸びてんのちやうんかい

西川「失礼な! ..測つてみい! 」

大川「測つて170なかつたらどないすんねん」

西川「なかつたら今まで怒鳴つてス!!マセンでしたつて土下座してあやまつたるわ!  
ほなお前もどうすんねん!..」

大川「うちか?うちはお前にマッサージしたるわ。死ぬほど痛氣持ちいいマッサージをなあ・・・」

にやりと笑う。

死ぬほど痛いマッサージをするつもりなのが、すぐに分かった。

大川「だいたいなあ、お前が小さいせいであから<sup>アラカウ</sup>ハビとか言  
われてんねんで・・・  
おどれのせいじやわれえ!..」

西川「オレのせいぢやうわーお前がでかいだけや!..」

大川「はあ!..186のど!がでかいねん!..」

西川「でかいわーでかすぎやわー!..その無駄な身長寄越せ!..」

大川「テメーなんぞにやる身長はねえんだよお!..」

「あの、少し静かに」

そういうわれ、横を見ると、涙目で笑っている店長さんがいた。

二人の会話が面白かったのだろう。

慌てて、二人は謝る。

すると、すぐに別の声がかかつた。

一方通行「よオ、三下ア」

垣根「よお、クソチビ」

西川「・・・俺だけにいつてんのか?」

一方通行・垣根「当たり前だろ」

西川「殺す!! ブツ!!」

頭に大川の拳骨が落ち、西川は机に顔を叩き付ける。そのまま、動かなくなつた。

一方通行「大丈夫かよ・・・死ンでねエか?」

大川「大丈夫や。こいつはゴキブリみたいにしぶとく生きるタイプ  
やから」

そういうと、頼んでいたパフェを全て食べる。  
ふと、垣根は気になつていたことを訪ねる。

垣根「そういうや、なんでお前らそんなに仲いいんだ? なんとなく気になつた」

大川「ああ、それはコイツとつちはい「強盗だ!! 命が惜しかつたら全員こっちに来い!!」チツ」

垣根（あれ? 今舌打ちしなかつた? したよね）

そんなことを思いながら声のする方を見ると、覆面をかぶつた強盗が3人いた。

第1位と第2位なら3人くらい赤子の手をひねるように簡単だろ? しかし、店を傷つけないようにする自身が2人にはない。どうしようか話し合つ。

すると、大川がこんなことを言つた。

大川「やつたら、うちがやるわ」

そういうと、ヒュンヒという音とともに強盗がいきなり、大川の前に現れた。

いきなりのことについていけなかつたのか、強盗は転ぶ。すかさず、大川は強盗の胸を蹴り、気絶させる。

二人は茫然とその行動見ていた。

呆然としている二人に気付くと、大川はにかつと笑い、自分の能力を言つ。

大川「うちの能力は『ムーブポイント座標移動』本当やつたらレベル5に認定され

てもおかしくないんやけど・・・自分を飛ばすのがなんとなく恐くてな・・・」

だから自分はレベル4のままなのだと苦笑いする。

結局、大川は風紀委員に呼ばれ、西川は垣根、一方通行と喧嘩しながら帰つて行つた。

次の日、レベル5たちは学校で逃げていた。  
理由は簡単、変態が涼音に近づこうとするからだ。

麦野「たぐつ、しつこい男ね・・・そんなんじや涼音に嫌われるわ  
よ」

西川「大丈夫や！涼音さんはツンデレやから！」

涼音「あらあ～。私ってツンデレ～？」

一方通行「安心しろ。その可能性はゼロだ」

今はまだ大川がない。

垣根「大川が来るまで逃げ切ればこっちの勝ちだ！！」

西川「ふはははっ！！！残念やつたな！！その前にオレが捕まえる！」

しかし、運悪く、大川が来てしまった。

直ぐに飛び蹴りをいれ、西川を戦闘不能する。

皆は喜び、一方通行と垣根は倒れた西川を踏み始めた。  
そんなこと無視して。女子同士話始める。

大川「いや～間に合つた～まだ何もされてへんやんな?」

涼音「別に何もされてないわよ～」

麦野「追い掛け回されたわ」

涼音「え? 鬼うつにしてんじゃないの～?」

麦野「・・・もういいわ。アンタはずつと天然でいなさい」

二口二口笑顔のまま涼音は首をかしげる。

麦野は、涼音が事態を知る前に西川をどうにかしようと思つた。

大川「アイツホンマにどうにかせなあかんの・・・  
・・・あつそや！～やつたら今度だいじはせじさい大霸星祭あるやんか?  
あんとき涼音さんにハツキリ決めてもらおうな～!  
選ばれへんかつた人はキッパリストッパリ諦める～!～どやつ?～

麦野「・・・いいわね、それ。分かつた? 涼音

涼音「え～? 何を選べばいいの～?」

麦野「好きなほう～!～

涼音「私はどっちも好きよ～」

ため息をつく。

どれだけ天然＆鈍感なんだと思つ。

麦野「そ・れ・は！友達としてでしそうが！…恋人としての好きよ  
！」

モヤシかメルヘンか変態かこのなかから選ぶのよ！…あつ、選ばな  
いつていつのもあるわよ」

涼音「恋人としてね～・・・」

うん、と首をひねつて考える。

それをみた大川が詳しく説明する。

その間に、西川が復活し、「痛い痛い！！蹴るのやめんか！」など  
と言いだしたが、無視した。

涼音「分かつたわ～。ふふ、大霸星祭が楽しみね～」

大川「まあ、あの男3人にとつたら真剣勝負やけどな。はいは～い！  
カス男子3人聞け～」

喧嘩をやめた3人に説明する。

すると、思った通り、お互いにらみ合い、勝負する気満々になつた。

麦野「なんだかおもしろそうね」

大川「やうやうへめつちやおもしろひやー。」

女子一人は面白がって陰で笑っていた。

### 37・勝負（後書き）

みつ・・短けえ・・  
何やすんげー短くなつてしまつたけど・・まあ気にしないでね

「えへ、今から抜き打ちテストをしまへす」

西川「なんでやねん！……卑怯や卑怯！……抜き打ちなんかせんでもいい！……」

「はいはへい、やりましょうねへ。ちなみに、点数はレベル別で採点しますよ。だから、レベル4の人は80点以上とらなかつたら赤点で、補習です。分かりましたね？西川さん」

西川「……はい」

笑顔でいるにもかかわらず、先生の目は笑っていなかつた。

直ぐに帰ってきたテストは、77点。赤点だ。

西川は死んだように机につづぶせになる。あの先生の補修はきつい。  
朝早く行き、補修、放課後も、門限ギリギリまで補習。

だから、あの先生の教科だけは、どんなに不良のやつでも、必死に  
勉強する。

前髪で隠れていない左目から涙が出てくる。

西川「なんでや〜、なんで補習やね〜ん・・・」

そういう、テスト用紙をひらひらさせる。  
すると、誰かにそのテスト用紙を取られた。

顔をあげると、そこには大川が大つ嫌いな女、小川おがわ百江ももえがいた。

彼女は、仲間を集めていじめをする。それを快く思わない大川は小川が大つ嫌いで、小川と話すると、暴言と毒しか出てこない。

すると、小川も皮肉なことを言つのだが、最終的には全て大川が勝つ。

小川「あらあら、貴方って馬鹿ですね。こんな問題もわからないなんて。無能力者の私でも91点とれましたのよ？まあ、化学は私の得意分野ですけれど」

西川「・・・」

何も話さない。

西川は小川が苦手だった。できるだけ合わない様にしている。そんな西川に、暴と毒の女神が舞い降りた。大川だ。

大川「西川に何しとんじやカス」

小川「まあ、誰かと思えば、ビビッてレベル5になれない大川さんじゃないです。別に何もしておりませんわ。ちょっとお話してただけですの」

大川「ビビッてレベル5になれないのは認めるけどなあ。テーマは無能力じゃねえのかあ？そんなカスみたいな人に馬鹿にされたくないんですけど。まあ、しょせんカスはカスだから人を馬鹿にすること自分で自分から田を背けてるんでしょうけどねえ」

小川の額に青筋が浮かぶ。

周りのみんなはいつものことだと無視をする。

小川は知らないのでが、不良友達以外はみんな大川の味方だ。

小川「あなたっ・・・！言わせ置けば好き放題に言つて！私が

無能力なのは、どこかの誰かさんに神様が能力を与えたからですわ！本来なら私が得るはずだった能力を！－どこかの巨女が！－

大川「あれ？自分の才能がカスなことを人のせいにするの？ここまで性格が酷いやつ初めてやわ。それにな、147センチのチビよりもでかい方がましまんですけど。なに？お前見た目小学生の方がいいの？頭可哀そうな奴。死ぬの？地獄落ちるの？」

小川「なつ！－なんですつて－－－－！私は生きますわよ－！」

大川「逝つて来い。カスチビ下衆女」

とうとう涙目になり、逃げ出した。

教師たちも、最初は止めていたのだが、もう止めなくなつた。

小川はこれくらいであきらめる性格ではないし、小川が悪いと分かっているからだ。

放課後、地獄補習に行くのを嫌がつた西川を無理やり行かせ、大川は一人帰つていた。

すると、それを見つけた涼音が近寄つてきた。  
ほかの4人は用事があるらしい。

涼音「あらあら～、一人で帰つてるの～？なら一緒帰りましょ～」

大川「おお、いーでいーで。全然OK」

そういう、早速話始める。

勉強のこと、最近起こつた面白いことなど。  
分かれ道に近づいたとき、ふと、涼音が言つた。

涼音「私ね～、誰かに恋なんてしたことないのよ～」

すると、大川は、意外そつた声を上げる。

大川「へえ～、うちは一回したことあるで。しかもな

涼音の耳に口を近づけ、小声で何か喋る。  
すると、涼音が驚く。

涼音「えっ？ それってとってもいいじゃない。あ～、パチパチ～

大川は照れる。

そういう、手を叩く。

大川「なんやそない言われると照れるやないか～。あ～、うしお～  
ちにいかな。じゃーな」

涼音「ぱいぱい

手を振り、別れる。

ひとりになつた後、涼音は考えていた。

涼音（私つてもあの3人の誰が好きなのかしら？）

それは、自分にしか分からぬ。

### 39・大霸星祭

あれから田にちが立ち、大霸星祭がやつてきた。  
話しがはや～いとか言わないでね。

涼音「・・・話長いわね～・・・」

垣根「立つたまま寝るとか器用だな・・・オレも寝ようかな・・・」

麦野「どうせだったら永眠すれば？」

垣根「殺す気か！？」

麦野「殺す気だけど？」

後ろの方で小声で話す。

すると、先生に見つかり、注意されてしまった。  
なぜか涼音は寝ているのが見つかなかつたとか。

一方通行「オイ。一種田つてあの三井の学校じゃねエか？」

削板「面白そうだなー！みに行つてみるかーー！」

そういうだす。すると、みんなも暇なため、暇つぶしに行くことになつた。

上条たちの学校がいる場所に行くと、すでに位置について合図を待つていた。

相手は能力者がかなりいる高レベルの学校。それにくらべて、上条

たちの学校はほとんど無能力者で低レベルの学校。

勝ち目はないと、レベル5たちも思った。

しかし、それは覆された。

合図の音が鳴ると同時に、上条の学校の生徒たちは走り出す。

それにくらべて、相手チームは、前列に遠距離攻撃の能力者を置き、攻撃をする。

次々と飛ばされていく上条たちだが、飛ばされても直ぐに起き、走り出す。

それからはずっとかかった。凄過ぎて何の競技をしているのか分からなかつた。

低レベル学校が高レベル学校に勝つた。

周りの観客も、驚いて、あの学校と戦つたら負けそなぞと言つていた。

涼音「・・・すごいわね・・・」

削板「根性！－根性で勝つんだー！」

垣根「・・・すげすぎて何もいえねえ・・何なんだよあのやる気は・・・」

垣根「・・・燃えてたわね・・」

「・・・」

一方通行「・・・灼熱の炎だなア・・・」

「それでは、ただ今より、○○学校対長点上機学園の、男女参加、  
『隠れ鬼』を超開始します。ルールを超説明します。まず、相手に  
攻撃は超OKです。逃げる人が鬼の人を凍らせたりして足止めする

ひとりを除いて、皆はしばらくポカンとして競技が終わっても動けなかつた。

しかし、涼音と麦野の競技が近づいてきたので、移動した。

のものOKです。見つかっても、捕まらなければ超セーフです。ですが、瞬間移動系の能力者は、物を瞬間移動させてもいいですが、自分と仲間、相手を飛ばすのは超駄目です。したら失格とします。行動範囲はこの中だけです」

画面にマップが映る。かなり範囲が広いが、それだけ人数も多い。そんなことよりも、麦野はアナウンスの声の主に聞き覚えがあった。

麦野「絹旗つて、放送委員だつたんだ…知らなかつたわ…」

仲間がアナウンスをしているのになんとなく違和感があり、麦野は絹旗の声を聞いていたとき、落ち着かないでいた。

絹旗「それでは、スタートしますので、鬼と逃げる人は位置についてください。あと、レーダーも渡しちゃいます。それでは超頑張ってください」

参加する生徒がぞろぞろと位置に着く。

それぞれの位置につくと、腕時計型のレーダーが渡された。

あれだけ広いのだからこれくらいは当たり前だろう。

絹旗「では、先に逃げる人は逃げてください。鬼の人は10分後に超追いかけてください。それでは…はじめ…！」

逃げる人は一斉に走り出す。

鬼は涼音、逃げるのは麦野だ。

めんどくさそうに頭をかきながら麦野は走っていく。

涼音はニコニコしながらそれを見ていた。

参加していない男たちはモニターで2人の様子を見ることにし、モ

ニターの近くの席に座る。

## 40 「隠れ鬼」？

見つかって追いかけられるのがめんどくさい麦野は、10分でかなり奥まで行っていた。

麦野「どこに隠れようかな～・・・隠れる場所も結構難しいわね・・・見つかっても直ぐに逃げられるようにしておかないとね。でも、このフィールド普通の街みたいね。やっぱり学園都市つてやばいとこだわ」

周りを見渡す。

周囲には、「隠れ鬼」をするためだけに作られた、壊してもいい街があつた。

「隠れ鬼」だし、能力を使ってもいいのだから隠れる場所があり、逃げる道もある街なのだろう。

麦野「さ～て、そろそろ10分立つかしら～さつさと隠れないといヤバイわね・・・そういうえば、別に、鬼に捕まりさえしなけりや、隠れなくてもいいのよね？だったら・・・鬼を動けなくすればこっちの勝つ確率が高くなる・・・ふふふ」

不気味に笑う。

鬼の涼音は、10分経つのをのんびり待っていた。

涼音「そろそろ10分かしら？みんな準備運動しきましょ～」

全員「～～～～～は～い～～～～～」

涼音のほんわかとした空氣に、味方全員がゆつたりと返事をし、準備運動を始める。

いきなり体を動かしても、そんなに動かないだろ。今のうちに体を動かしておくのだ。

「はい！残り10秒です。超いきますよ。5・4・3・  
2・1・」

鬼は全員走る準備をし、緊張して構える。そして・・・

「〇――！」

鬼たちは走り出す。

鬼同士が戦うのはOKなのだが、最初は敵をじみちに減らして、後から鬼の数を減らそうとしてるのだ。

涼音も走り、レーダーを見る。

まず近くにはいないだろう、近くにいたら、すぐに見つかってしまう。

涼音「麦野は逃げたかしら？・・・大丈夫ね？」

あの麦野だ、不良さえも震え上がるような怒気を放ち、メルトダウナーを撃ちまくるだろう。

ふと、画面を見ると、自分が写っていた。

残っている男子を安心させるために、涼音はいつも通りの目が明いていない笑顔でカメラにピースする。

西川だ。彼を見た一方通行が逆に聞く。

西川「よ～何しとんや？」

画面にいつもの笑顔で映った涼音みて、言つ。

とりあえず、涼音は大丈夫そうだ。

麦野も、あの性格だから見なくても大丈夫だろ？。そう思ったその時、後ろから抱き着かれた。

垣根「おつ、涼音。余裕そうだな」

一方通行「テメー」は何してんだア？」

削板「暇なのか？」

すると、西川は首を縦に振る。

西川「暇やで。やから、「隠れ鬼」に大川が出てるから暇つぶしにみとこつかな~っておもて。なんや、アンタらも「隠れ鬼」に誰か出でるんか?」

削板「ああ、麦野と涼音がな。麦野が逃げる方で涼音が鬼だ。ちょうど画面に映つてゐや」

西川「まじかい!!」

直ぐに画面を見て、騒ぎ始める。

西川「涼音さん!! ホンマ涼音さんは可愛くて綺麗やわ~・・・  
勝負はオレが勝つ!!」

こっちを向いたかと思うと、垣根と一方通行に指を指し、言ひ。  
一人も、やる気の顔になる。

垣根「おもしろいもつじやねえか・・・後でほえ面かくなよ?」

一方通行「ハツ!...それは」*うつむけのセリフだぜ*「...」*下に負けるな*「ありえねエ」

西川「今までオレは涼音さんに想いを素直に伝えてきた!」*(行動で)*  
オレに惹かれたはずや!...」

3人の周りに灼熱の炎が見えるような気がする。

削板は隣で

削板「根性!...」*うじょ*おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおお!...」

などといい、一人で燃えていた。

周りの人たちは、あまりの熱さに、離れて行っていた。

涼音「へしゃんつーーあらあらー、だれか私の噂をしてるのかしら  
～？」

涼音は、のんびりしゃべることを言っていた。

41：「隠れ鬼」？

参加者

「隠れ鬼」が始まつて5分後、びゅんつという音が聞こえ、太いレーザーが建物を貫き始めた。

違う場所では、建物を超える火柱が10本以上たち始める。見る見るうちに、あちこちで火柱と、ビームが見える。麦野と涼音が暴れ始めたのだ。

自分の前を走る、敵の逃亡者を追いかける。

敵は、涙を流し、必死に悪魔と化した麦野から逃げる。

「くそ・・・・・・でも何とかして止めないといけないですね・・・・兄様！我ら、兄妹の力見せてやりましょう！！」

「やるぞ！妹よ！！」

「前から思つてたけど、お前ら兄妹変だぞ。」

友達の冷静なツッコミを無視し、兄妹は止まり、麦野の前に立ちふさがる。

「！」まだ！！我ら兄妹の必殺技！！

「必殺！！！超激水流！！！」

麦野に向かつて、大量の水がすごい勢いで向かう。  
ひとりだけではいまいちだが、二人で威力をあげたのだ。  
しかし、麦野にとつては、威力をあげても意味がなかつた。

「ウツメニ」

「ひい川！」

メルトダウナーで水を飲み込み、消す。

兄妹の顔をすれすれ通り、メルトダウナーはそのまま進み、兄妹の

技を見ていた敵を吹き飛ばした。

敵は、飛ばされた衝撃で、気絶し、そのまま地面に落ちた。手加減をしていたので、少し服が焦げているだけだった。

麦野は、兄妹に近づくと、腹に一発ずつ入れ、気絶させた。

そして、そのまま放置し、標的を探し、歩き始めた。

～～～不参加者～～～

垣根「・・・なんでかな・・・麦野が悪魔・・・いや、大魔王に見えてきた・・・」

一方通行「大丈夫だ。みんな、そオ見えてる。お前だけじゃねエ」

西川「オレは、あの人好きにならなくてよかつたと、思つてゐる」

削板「・・・・」

いつも五月蠅い削板も何も言えなくなるくらい、麦野は怖かった。周りの人たちも、あまりの怖さに、震えるものもいるくらいだった。

~~~~~参加者~~~~~

涼音「あらあら～、結構しぶといわね～」

「アンタ、レベル5の炎魔王だろ？アンタを倒してオレは名をあげる！！」

そういう、目の前のまだ顔に幼さが残る少年が、涼音にとびかかる。しかし、涼音は鬼、少年は逃走者。涼音は、少年に触られてもいいのだ。

涼音「はい、アウト」

「・・・・・ヘルニアの病状は、おおむね腰痛と下肢痛で、

少ししてから事態を分かつた少年は悔しそうに地面をたたく。そんな少年をみた涼音は、少年の頭をなで、言ひ。

涼音「悔しがるつてことは、貴方はそれだけ本気だつたつてこと、  
それはとてもいいことよ。悪いのは、皆が本気を出してる中、本気  
を出さないこと。だから、貴方は立派なのよ？」

「・・・うつ・・・うん！！分かった！！」

「『」と笑い、差し出された手を取り、立ち上がる。

めた。

~~~~不参加者~~~~

男子3人は、殺氣だつていた。

鬼のような顔で、モニターを睨みつける。

西川「あの男、スライスしていいか?ええよな?」

「垣根」待て、オレにもせりせり・・・痛めつけて『三箱に捨ててやる

一方通行「だつたらオレは骨を全部折る」

削板一本本当にそんなことしたら犯罪だぞ」

「・・・・・チツ！」「

削板（本削り）か（手削り）かの問題

横で騒ぐ3人を見て、涼音は幸せだなーと、思つ。

「あの〜、すみません・・・」

削板 「ん？」

呼ばれて、後ろを振り向くと。優しそうな顔をした、細めの男性が居た。

## 42・その1の「大西

やあ、読者のみなさん、「んにちは。

うち、うちは大西や。 大川 薫。

今、うちは「隠れ鬼」の鬼をやってんねん。

でもな・・・正直言つと・・・

・・・めんどくせえ・・・

なんでうちが「んな」とせなあかんねん。 なんでや。 なんで?  
誰や決めやがつたやつ。 うちは委員長や。 うちが決定すんねんぞ。  
えへと・・・なんで「な」になことになつたんやつけ~?

～～～数週間前～～～

大川「は～い。今から大覇星祭で、何の競技に出るかきめま～す」

やる気のない声で大川は言う。  
正直言うと、彼女は委員長をするのに厭きてきていた。そのため、  
めんどくさいのだ。仕事が。  
なぜ彼女が委員長をしているのかといつと・・・・

ただ、おもしろそうだったから。

単純に、気持ちでやるといったのだ。

彼女は自分の性格を、熱しやすく冷めやすい、気分で行動する、口  
より手が出る、かなり強いのが。人の好き嫌いは激しい、などと、  
自己紹介の時に言った。

大川「まず適当にやりたい競技行つて~。それだとしてな。めんどくせこから」

西川「出たよーー口癖の「めんどくさい」！ーーいい加減その性格直さんかい~お前、そのせいであんまり遠くに行かないやないかー」

大川「うるせえ、テメーみてえな野郎に言われたくねえんだよ。あーもー、西川は一番きつい競技にけつてーい」

西川「なんでやねんーー」んな時にオレを虐めんなーー」

大川「はいはーい、全員賛成ですかー? 賛成やつたら手をあげる」

全員「はーい」

西川「なんでやねんーーー」

西川が必死に嫌いやだというが、皆は面白がるだけで助けようとしない。

大方決まったところで、めんどくせ事が頂点に達した大川が、最終手段をとった。

大川「はあ・・・もう何もかもめんどくせえ・・・もう後はくじ引きで決めるぜ~」

全員「はーい」

全員がやつぱり出た～などと言ひづ。

彼女は本当にめんどくさくなると、くじ引きで残りを全て決める。このようなことが多々あるため、彼女はいつもお手製のくじ引きをもつている。

最初、皆はそんなの嫌だとか、大川に散々言つたのが、聞いてもらえなかつた。

それでも、大川の怒つた時を知つている友達が必死に止めようとしたが、聞かず、不良系の男子たちが大声でねちねち言い続け、とうとう、大川がキレたのだ。

その時は、暴言と毒を吐き続け、最終的には、その男子たちを全員素手で黙らせたのだ。

順番にクジを引き、最後に大川がクジを引く。  
合図をし、皆が一斉クジを見る。

途端に、最悪だとカラッキーとか、様々な声が聞こえてきた。  
西川はよかつたらしく、嬉しそうな顔をしていた。

大川はというと、立つたまま寝ていた。  
そして、そのまま起きず。決められたのだ。

そりや・・・！あんときうちが寝たからやー！なんかめつけや  
たかつたから寝てもたんや！

なんであんとき寝てもたんや自分ー！寝てへんかつたら能力使つて  
入れ替えれどったのに・・・！

そんなことをしてはいけません

アホやー！うち！勉強は普通よりこいけど別に意味でアホやー！でも、  
西川よりアホとは認め辺でー！  
アイツは勉強も別の意味も、レベル4としたらアホやもんー！

そんなことを考えながら、うちは敵を追い掛け回す。

／＼＼ 3人称／＼＼

うなりながら、大川は敵を次々に捕まえていく。

足が超早い彼女からはたとえ男子でもそう簡単には逃げられない。

大川「待てやゴラア――――――――めんどくさいからもういい  
加減捕まれやクソボケエ――――――――！」

「だつ誰が捕まるか！…お前はバカかよ！…」

大川「ああん！？（怒）誰がアホやと！？女のうちから無様に逃げ回る男のお前の方がアホやと思つけどなー！」

「なつなんだヒー・ヒー・ぐああああああああー・ー・」

プライドを傷つけられ、男はこける。

直ぐに大川はこけた男子をタツチし、残りを追いかけ続ける。

テレビの向こうでは、西川たちがあまりの怖さに震えていたのだが、何も教えられず、競技が終わつた後も、大川は知らなかつた。

## 43・オッチャン

「少し、時間をいただいてもいいかな?」

そういう、竜のネックセスをつけ、一口ひと笑ひの男性。  
不参加の男たちは誰だコイツという顔で男性を見るが、そんなこと  
は気にせず、男性は喋りだす。

「実は迷つてしまつてね・・・「隠れ鬼」をしてるとひむせびいか  
教えてほしいんだ」

西川「それやつたらいいやで、オッチャン」

「やつなのかい!?いやー、やつさまでこの周りをグルグル回つて  
たんだが・・・なにせ方向音痴でね。地図を見つけてみて、さあ行  
こうとしてもやつぱりでね。困つてたんだが・・・そつか、ここな  
のか」

細田の男性は画面を見る。  
すると、西川が話しかける。

西川「なんや? オッチャンの子供が出てるんか? ビーの学校なん?」

「ああ、私の子供は長点上機学園の生徒なんだ。優秀だろ?」  
ながてんじょうがく

自分の子供が優秀なのは、だれでも自慢したくなる。

この男性もそりゃしく、細田のため見えない目と顔を西川に向ける。それを聞いた西川は顔を輝かせる。

西川「まじー？ オレもオレも…！ 長点上機学園ながてんじょうきの生徒やで…！ オレみたいに優秀なやつがオッチャンの子かぁ…・・すついこい嬉しいやろ？」

垣根「おい、オッサン。そいつはバカだぞ。ただ能力が高いだけだ」

一方通行「オレこいつたら三下みしもだぞオ三下ア」

その言葉に、垣根が反応する。

垣根「なんだそりや？ ってことはオレも三下って言いたいのかよ」

すると、一方通行が鼻で笑う。

一方通行「はつ！ そりやつもりなんだがなア！ あれエ？ バ垣根くんには分からなかつたかなア？」

垣根「殺すぞ」

一方通行「やれるもンならやつてみやがれ。三下ア…！」

削板「やめろ一人とも！…そんな」とすれば風紀委員に捕まるぞ！」

西川「いや、捕まるだけじゃすまないやん」

「はつはつはつ…仲がいいなあ

西川「いや！全然仲よくなide！？オッチャンこれは全然仲よくな  
いんやで！？」

「そうなのかい？まあ、仲よさうだからいいじゃないか。あつ、  
そろそろ終わるな・・それじゃあ、世話になつたね」

手を振り、どこかに行く。

能力を使おうとする一人を削板がなだめている間に、「隠れ鬼」は、  
長点上機学園の圧倒勝ちで終わった。

選手たちが次々に出てくる。

その中で、麦野と涼音、大川を見つけた男たちは昼食を食べに行こうという。

「隠れ鬼」は人数が多く、時間も無制限のため、かなり時間がかかる。

それに、次の競技に入れればまた長くかかるため、今のうちに食べないと昼食を食べるのが3時くらいになってしまいます。

しかし、涼音は断つた。

涼音「ごめんなさいね～、一緒に食べられないわ～」

大川「?なんでや?」

涼音「親が来てるのよ～。一緒に食べる約束をしてるの～。それじゃあね～」

そういう、親と待ち合わせの場所に行こうとする。

しかし、走り去ろうとする涼音の横顔を見て、垣根はさつきの男性のことを思い出し、涼音の腕をつかみ、止める。

垣根「…一ひとつ…待てよ…」

涼音「え？ なに～？」

垣根「お前の親父つてさ・・・お前みたいに目が細目?」

涼音「そ、うよ～」

垣根「それじゃあ……竜のネットクレスしてる……？」

そう聞くと、めったに開かない涼音の田が開き、炎のよつに紅い田が現れる。

おどおどひ、垣根に聞く。

涼音「な・・んで知つてる・・の？」

垣根「・・・やつぱりお前の親父か」

涼音「え？お父さん会ったの？」

卷之二十一

すると、涼音が間違いなくお父さんだという。

涼音「お父さん。かなりの方向音痴でね～。一度、海に行くはずが、山に迷つたことがあるのよね～・・・それから、運転するのは絶対にお母さんだつたわね～」

麦野「どんなけよ。海なのに山とかありえないでしょ」

涼音「あつえたのよ~」

麦野「・・・そつりしいわね・・・」

後ろで大川があつえねえ・・・ヒ、つぶやく。  
しかし、涼音が言つのだから本当なのだろう。

ぐづく

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

大川「・・・・腹減った。飯」

西川「・・・KY」

大川「KYでいいし。うちは気にせんから」

空気を読まない大川の腹が鳴つたため、皆は涼音と一緒に店で食べることにした。

#### 44・食事（前書き）

髪の毛を少しづつ切りました。

わ、髪の毛洗うの楽ですねーー。

私、量がとても多いですから・・・

今度からずっと短髪でいよがき真剣に考え中・・・

「まあまあ～、涼音のお友達～？涼音がお世話をなつてます～」

「ああ、ハイ。お世話をしております」

「バ垣根」

「イテ」

お店に行くと、本当に高2の母親かと疑いほど、若い容姿で、笑顔で涼音の母親が迎えてくれた。

そして、上の会話をした。

変な返事をした垣根を、麦野がペシッと叩く。

(それにしても・・・よく似てるな・・・)

大川はそう思い、まじまじと涼音の親を見る。

細目と人を癒すような雰囲気、は父親から、喋り方とほんわかとした雰囲気、細く、すらりとした体は母親からもらったのだろう。父親は涼音と顔がよく似ていた。間違いないこの一人の子供だ。

涼音の母は何か思い出したのか、パンツと手を叩く。

「そうだったわ～。実は～あの人たちと一緒に食べることになったのよ～」

そういう、手のひらを向ける。向けた方を見ると、ツンツウ二頭の不幸少年と、超能力第3位、シンデレールガンが居た。二人の横を見ると、大人がいる。親だろうか。しかし、御坂の方は、どう見てもお姉さんにしか見えない。

麦野はとりあえず挨拶をしておく。

「はじめまして。涼音の友達、麦野 沈利です」

すると、後ろで垣根が笑う。

「くくく・・麦野が敬語とか・・・！」

「ああん？」

「『』めんなさい」

不良さえも震え上がる顔で垣根を睨む。その顔をみた垣根はすぐに頭を下げる謝る。

皆はくすくす笑う。しかし、お腹がすいた大川は早く食べようといい、皆はそれぞれ座り。注文する。

「あかん・・・腹の中空っぽや・・・」

「お前、朝全然食べへんもんなあ。もっと食べんかい」

「朝は食力ないんや・・・うじうじいつな。つざつたい」

「何やと!—お前おじれ!—」

「何でおじりなアカンねん!—自分で払えや」「ラアー!—」

「財布忘れん!—」

「テメー馬鹿だろ!—正真正銘の馬鹿野郎だろ!—!」

ぎやいぎやに漫才を始める一人を見て、店の中の全員が笑う。しかし、一人には周りが見えておらず、なおも会話が続く。やっと終わった時は、料理が運ばれてきたときだった。

「皿そだなア・・・いただきます」

手を合わせ、食べ始める。

マナーを守らないと涼音から愚痴ぐち言われる所以、マナーを守り、正しい箸の持ち方で食べる。

口に入れると、肉汁がじわっと口に広がる。

隣でも、美味しそうに涼音が食べている。そんな涼音の顔を見て、一方通行は勝負を思い出す。

(負けるわけにはいかねエ・・・三下なンかに負けてたまるか)

すると、そんな一方通行の考えが分かったのか、垣根と西川も相手に向けて殺氣を放ち始める。

それを見た麦野と大川はコソコソと涼音と喋る。

(ちよつと涼音!男子たち思つた以上に本気よー!)

(ちやんと考へてんのか?..)

(・・・忘れてた)

(ちよつーーー!)

本人は忘れていた。

(どないすんねん!誰にすんねん!..!)

(うーん・・・・まだしつくつこないのよね~)

(ちよつちやと決めちやこなさいよー!)

(根性だ!)

(（黙れ））

(（あやおひーーー?）

二人が削板の手に箸を指す。

あまりの痛さに声が出るが、それでも何とか小声にする。

騒ぐみんなをよそに、涼音は考えていた。

（好きな人・・・ねえ・・・）

今まで、一方通行は幼馴染、垣根は友達としか見ていなかつた。それなのにいきなり好きと言われて、二人をどう見ればいいのかわからぬ。

大川は初対面から告白してきたので、見れる。それでも、分からぬいのだ、好きになるということだが。

（そろそろ真剣に考えないとね～）

だいはせいさい

大霸星祭だいはせいさいが終われば、あの3人から選ぶか、選ばないかハッキリ決めないといけない。

そう思い、涼音は3人にそれぞれであつた時を思い出し始めた。

45・騎馬戦 1(前書き)

お気に入り・・・100・・・超え・・・やと・・・?  
初めてですよ!お気に入りが100いつたのは!  
この調子でガンガン書いていきますね!!

「食つた食つたー！」

お腹をバンバン呑きながら西川が言つ。その隣では大川が財布の中身を確認していた。なんだかんだ言つてもおひつてあげるみたいだ。さすがレベル4。

「うーす。じゃア行くか。次はなんだ？」

「えへと、確か男子全員で騎馬戦だったわよ。もちろんアンタたちも絶対に出る」

「へへーーー。なんだこりんなガキがやるやつをオレがやらなくちゃいけねえんだよ。めんどー」

「まあまあ、そういうなつて。がんばれば女子にもつるで」

「オレはもとからもつてる」

「「」のクソリア充が」

「「」ア充爆発しろ」」

西川と一方通行が声をそろえ、垣根に向かつて死ね死ねと親指を下に向ける。

しかし、垣根はそんな2人に喧嘩をつくる。

「なんだあ？お前ら2人、もてないから羨ましいんだろ？リア充って言われ程完璧すぎるオレに嫉妬して」

「クソメルヘン調子に乗んな下衆野郎」

「・・・毒舌やめてくれ」

「ん？ああ、つい本音がでてもたわ。スマンスマン」

垣根の横でひとつ」とのようになにか毒を吐く大川。傷ついた垣根は涙目になっていた。

「それより～、そろそろいきましょ～」

「涼音さんたちもうこいつちやうの？」

「がんばってな」

「あらあら～、ありがと～」

手をひらひらと振り、レベル5とレベル4たちは店を出していく。  
残った当麻家族と御坂家族はそのあともしばらく話をしていた。

「それでは、これより騎馬戦を始めます。それぞれ位置について準備をしてください」

その声を聞いて、男子たちは動き出す。  
涼音たちは観客席で見ている。

「クソ～、それにしても嫌だなあ。第一位の下とか」

「あアン?何言つてんだよ垣根ぐうん。テメーにはその位置がお似合いだゼ」

「落とすぞ」

「おおつと。オレを落としたら俺たちの学校の負けになるんだがせ」

？」

「その通りだ。一方通行は大将なのだ。足は削板と西川。台は垣根だ。大将のため、一方通行が鉢巻を取られてはいけないのだ。

垣根は歯をギリッと鳴らす。

「つむせえ！！テメーは絶対にこの競技が終わつた後にぶつ殺す！  
！覚悟しとけよ！！」

「おもしれェな！！三下がオレに勝てるとも思つてゐんのですかア  
？バカだなア」

「はつはつ！燃えるなあ！根性！-！」

「誰かこの位置変わつてや」

騒ぐ一組の騎馬を見て、周りは笑いだす。  
一気に緊張感が無くなり、騎馬戦をする前だけは思えない雰囲氣になつてしまつた。

そんな雰囲気を見て、麦野の額に青筋が浮かぶ。

「あんの馬鹿ども…………これから勝負だつてのに…………」

「まあ、いいんじゃね? つちには関係ねえし」

「あらあら~。関係あるわよ~? だつて学校の宣伝とかあるんだし~」

「ああ、そんなのがつたな。まあ、うちらの学校には関係なくないか? だつてうちらの学校つてが五本指の一角に入る学校やで? 学園都市について学校の話したら絶対にうちらの学校の話出てくるつて」

そういうと、きっと麦野がこっちを向いた。

別に驚きもせず、大川はなんでこっちを向いたんだと眉を寄せた。

「テメーなあ!」<sup>だいはせじさー</sup>の大**霸星祭**なめんじやねえぞ! 一年に数回しかねえ大がかりな宣伝だぞ! ! ! どうでもいいなんて考えてんじやねえぞおおお! ! クソガキイ! !

そういうわれ、大川からブチつという音が聞こえた。

あらあら~と微笑みながら、涼音は一人から距離を取る。すると、涼音の読み通り、一人が口喧嘩をはじめた。

「なんだよ……てか、こんなことでいちこちキレるとかガキかよ。

眉間にしわよせてつとしわだから家になるガタ、ババア」

「ん・・だとおおーー? もうこつぺん行つてみろやガキイーー!」

「何回でいつたわるわ!ーだいたいなあ、ティーーと同じ年なんですけど。何? それすらも分からぬの? つわあー。頭可哀そつな老け顔のチビやなあ」

「殺すぞおおおおおおおおおおおおおおーークソボケHHN  
HNHNHNHN」

「逆に殺してやるぜええええええええええええええーーカスチビイ  
イイイイイイイイイイイイイ」

268

大声を上げてお互いの顔をひねり合ひ。そんな二人をみた男子4人は声をかけて止めようとする。

「おオイ。やめろよ」

「迷惑だぜ」

「元気だな」

「わうわうわ。だいたいじつちむじつひやん。子供の喧嘩やな

「西川あああアアアーー?」

「えつ?」

西川の余計な一言を聞いた二人は鬼の形相で4人を見る。そして、

「全員死ぬ気でがんばれエー！！！負けたら殺されるぞオーッ！」

一気に男子たちの私語が無くなり、目が本気になる。叫んだことと、ちゃんとしだしたことを見て、一人はどかっと椅子に座る。

喧嘩を終わったのを見ると涼音が戻ってきた。

「すいに喧嘩だつたわね」

「ああ、でも久しぶりにキレたで。すつきりしたわ」

「本当ね。清々しいわ・・・」

二人は本当に清々しそうな顔で目を細めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2680v/>

とあるのんきな炎女王（フレイムクイーン）

2011年11月21日06時59分発行